天理市埋蔵文化財調査概報

（平成12年度・国庫補助事業）

柳本立花遺跡
ヲカタ塚古墳

2001

天理市教育委員会

例　言

1．本書は、天理市教育委員会が平成12年度国庫補助事業として実施した柳本立花遺跡およびヲカタ塚古墳における発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、天理市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、技術吏員青木勘時が現地調査を担当した。

3．本書収録の調査地および調査期間は以下の通りである。

柳本立花遺跡　調 査 地：天理市柳本町2902－１・５・６
調査期間：平成12年10月18日～12月13日

ヲカタ塚古墳　調 査 地：天理市渋谷町574
調査期間：平成13年２月14日～３月13日

4．現地調査から遺物整理作業および本書作成に至るまでに下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表する。

石田由紀子（立命館大学学生）、石井亜希子・杉澤友香里（奈良大学学生）、
村上真理（奈良教育大学学生）、芳村信芳、中森富美代、藤岡早希

5．現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。

石野博信（香芝市二上山博物館館長）、和田晴吾（立命館大学教授）、山内紀嗣（天理参考館）、萩原儀征・清水真一（桜井市教育委員会）、岩崎大介（桜井市文化財協会）、小池香津江・高橋幸治（奈良県立橿原考古学研究所）、吉田野乃（八尾市教育委員会）、清岡廣子（明日香村教育委員会）、廣瀬覚（立命館大学大学院）、篠原慎二（国学院大学大学院）、森脇智子（堺女子短期大学卒業生）

6．本概報の執筆および編集は青木勘時がおこなった。

目　次

平成12年度国庫補助事業による発掘調査地の位置……2

柳本立花遺跡の調査

Ⅰ．はじめに……3
　１．調査の契機と経過……3
　２．周辺の遺跡……4
Ⅱ．調査の概要……4
　１．層序……4
　２．検出遺構……6
　３．出土遺物……10
Ⅲ．まとめ……16

ヲカタ塚古墳の調査

Ⅰ．はじめに……20
　１．調査の契機と経過……20
　２．周辺の遺跡……20
Ⅱ．調査の概要……21
　１．北トレンチ……21
　２．中央トレンチ……22
　３．南トレンチ……23
　４．出土遺物……23
Ⅲ．まとめ……25

図１　平成12年度国庫補助事業による発掘調査地の位置（S=1/10000）

柳本立花遺跡の調査

Ⅰ．はじめに

１．調査の契機と経過

天理市南部の大和・柳本古墳群周辺では、広範囲に遺構・遺物包含層の拡がりと遺存が想定され、現状においても遺物散布地が数多く散在することが知られている。このため時間的に整合する集落遺跡については、先述の前期古墳群形成に関わる基盤集落群となることが考えられている。

柳本立花遺跡は、弥生後期末～古墳前期の土器片の散布より奈良県遺跡地図第２分冊11-D-20と記載される周知の遺跡として認識されていたが、これまでに正式な発掘調査はおこなわれておらず、遺跡内容は不明なままであった。今回の調査は、当遺跡範囲内において島岡孝義氏による個人住宅建設が計画されたため、これを契機として遺跡の実態を知ることを目的とした範囲確認調査を実施したものである。

調査は、調査対象地における住宅建設予定地にほぼ収まるように東西、南北幅ともに10m前後の方形の調査区を設定して実施した。調査対象地では現地調査に係る以前には既に造成土による整地が施されていたため、現地表下約１m前後までの上部堆積層を重機により除去し、その後は人力掘削により調査を進行した。また、その際に二面の遺構検出面を認識し、最終的に地山面直上までの遺構検出をおこないながら調査を進めた。

現地における調査は平成12年10月18日より開始し、12月13日にすべての作業を終了した。

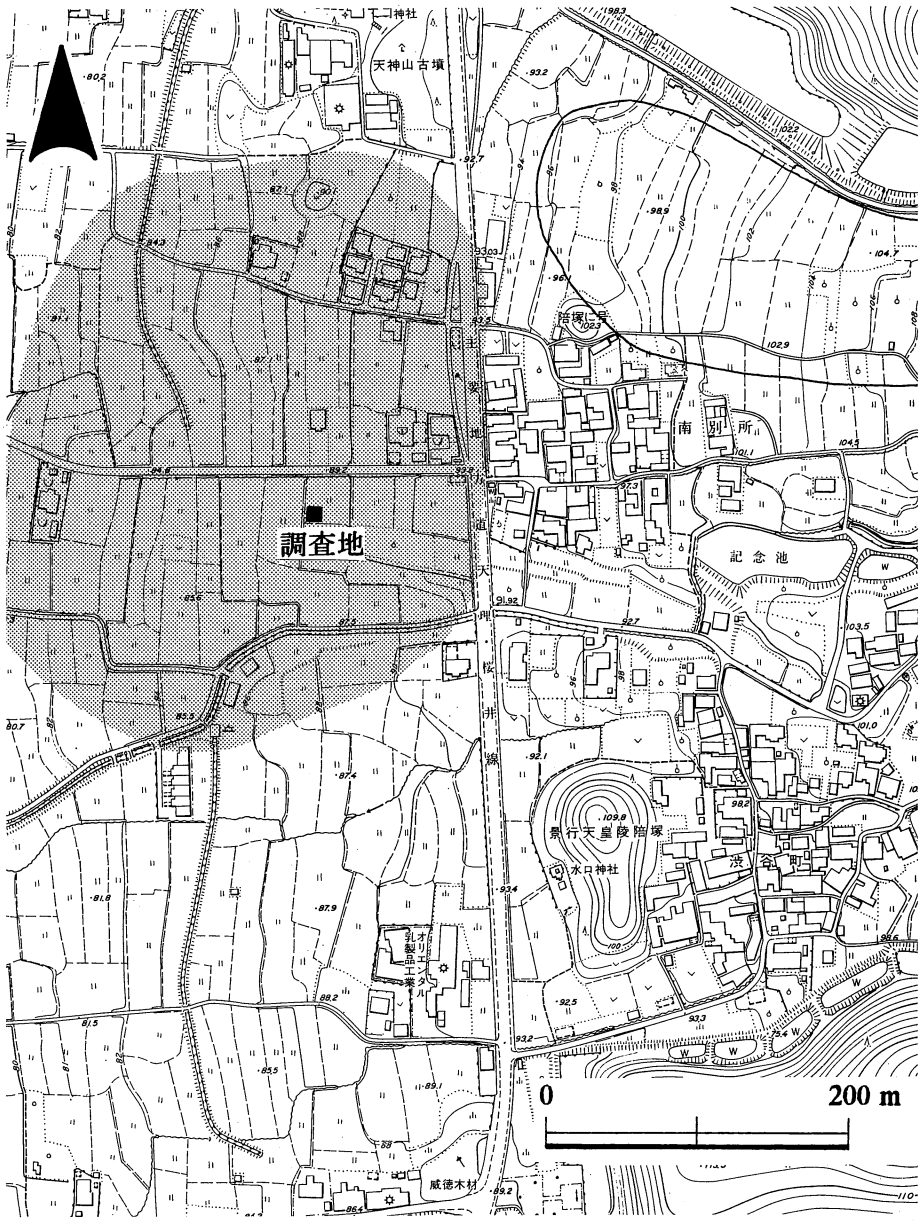


図２　遺跡の位置図（S＝1/5000・黒塗りは調査地点を示す）

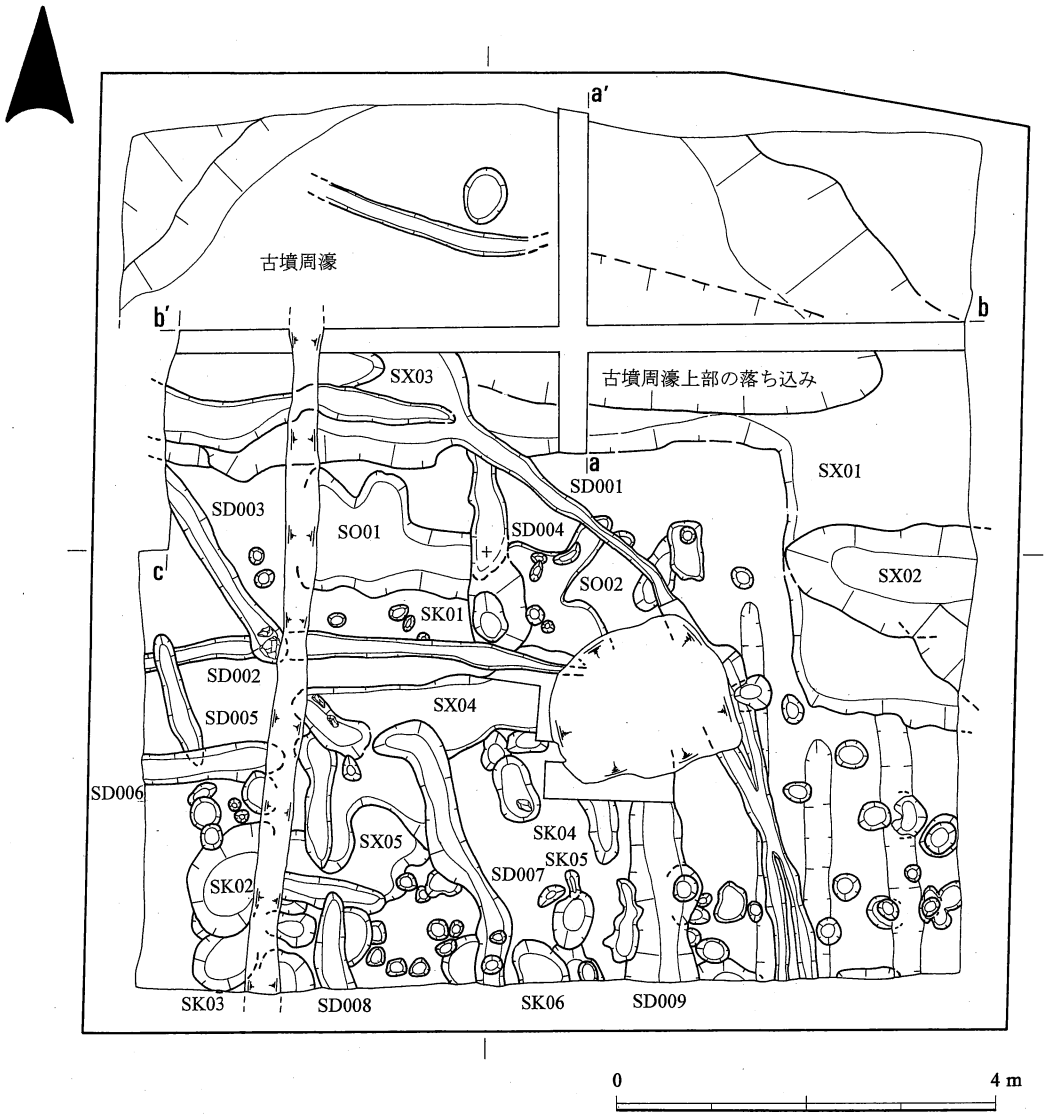


図３　調査区平面図（S=1/80）

２．周辺の遺跡

柳本立花遺跡をはじめとする大和・柳本古墳群周辺の集落遺跡は、その多くが盆地東山麓から延びる丘陵上あるいは丘陵末端の微高地上に立地している。当遺跡の周辺では、柳本古墳群に含まれる幾つかの前期古墳の分布が知られており、調査地の北方では　23面の銅鏡出土で知られる大和天神山古墳、南東方では渋谷向山古墳（景向天皇陵）とその陪塚に比定される上ノ山古墳が所在する。また、北東には渋谷行燈山古墳（崇神天皇陵）があり、その南側の谷筋付近には広域な弥生後期～古墳時代の遺物散布が認められる山田遺跡が所在する。このように当調査地付近は集落あるいは古墳の分布密度の高い地域であると言える。

Ⅱ．調査の概要

１．層序

調査地における基本的な層序は南壁土層断面（図４上段の柱状土層図）より認識することができた。まず、ここではその概観を述べ、次に他の壁面の観察による層序と遺構面との相関関係について簡単に

説明しておくことにする。

［基本層序］

造成土：調査区全域を層厚30～60cmで覆うように客土された土砂の人為的な堆積である。

第Ⅰ層：褐灰～暗灰黄色細砂混じり粘質土（旧耕作土）。上位の造成土を搬入する以前までに機能していた水田面を形成する土層である。（南壁中央１・２層）

第Ⅱ層：黄褐色粗砂混じり砂質土（床土）。耕作土より下面の水田床土となる土層。（南壁中央３層）

第Ⅲ層：褐色粗砂混じり粘質土（遺物包含層１）。近世以降の条里水田の耕作による撹乱土層である。細片となった弥生末～近世の土器、陶磁器片等の遺物を若干量包含する。（南壁中央５層）

第Ⅳ層：にぶい褐色粗砂混じり粘質土（遺物包含層２）。調査区の全域に遺存する弥生末～古墳・奈良時代までの土器片を含む遺物包含層である。上面では条里水田に伴う南北方向の素掘り小溝群が検出されている。（南壁中央７層）

第Ⅴ層：暗褐色砂混じり粘質土（遺物包含層３）。南壁土層断面の西半にのみ確認しており、堆積層の広がりは調査区南西の一角に限られていた。須恵器、土師器等の多量の土器片と炭化物、焼土塊を包含しており、後述する住居跡遺構埋没時の覆土となるものと考えられる。なお、下部の第Ⅵ層（基盤層）直上では粘性の強い粘質土となり、前記遺構の床面直上埋土や柱穴、炉跡等の埋土となるものと思われる。（南壁中央９・11層）

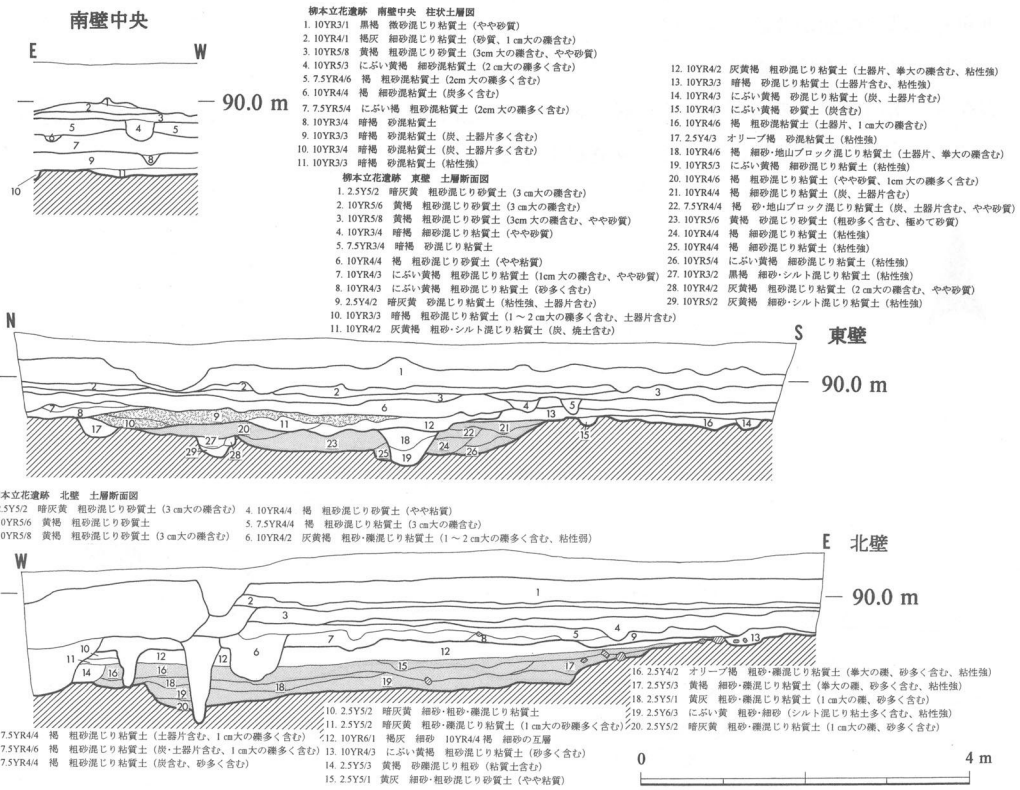


図４　調査区各壁面土層断面図（S=1/80）

第Ⅵ層：明褐色細砂混じり粘質土(基盤層)。当地における地山面を成す無遺物層である。下部は同色の砂礫混じりシルト層あるいは部分的に細砂層となっている。上面は調査地内の遺構の大半を検出した遺構面となる。

［遺構面との関連］

調査区全域では、当初第Ⅳ層上面より遺構の検出、確認をおこなったが、結果的には南北方向の素掘り小溝群のみを検出した。これより下位では、一部に第Ⅴ層の遺存する箇所を除いては、大半の遺構を第Ⅵ層上面で確認している。これらの遺構には明瞭な輪郭を示す土坑、柱穴、溝以外にも、不整形な平面形を呈した浅い遺構が含まれていた。これらについては下面に明瞭な輪郭で遺構を検出できたものも見られるため、遺物包含層の落ち込みであったかもしれない。

遺物包含層の内容からみた各遺構検出面における時間幅では、第Ⅳ層上面では中世全般から近世初頭、第Ⅴ層および第Ⅵ層上面では弥生末（庄内併行期）～古墳後期・中世以前となっている。

2．検出遺構

［第Ⅳ層上面検出遺構］

層序の記述にもあるように、第Ⅳ層上面では南北方向の素掘り小溝群を検出している。それぞれの小溝の存続期間は第Ⅳ層より上位からの掘り込みを含めてほぼ中世後期～近世・近代まで継続した耕作痕跡を残しており、一貫して南北に方位を取る地割りを踏襲することが窺えた。また、調査区の西端では暗渠排水路や田畑の境界を示す幅広な南北溝を検出しており、調査区北壁の土層にもその変遷が知られる重複した溝の断面が確認されている。

［第Ⅴ・Ⅵ層上面検出遺構］

調査区の南西側にのみ遺存する第Ⅴ層と第Ⅵ層の基盤層の上面では高い密度で遺構の検出が認められた。ここでは、主要な遺構についてのみ概観することにしておきたい。

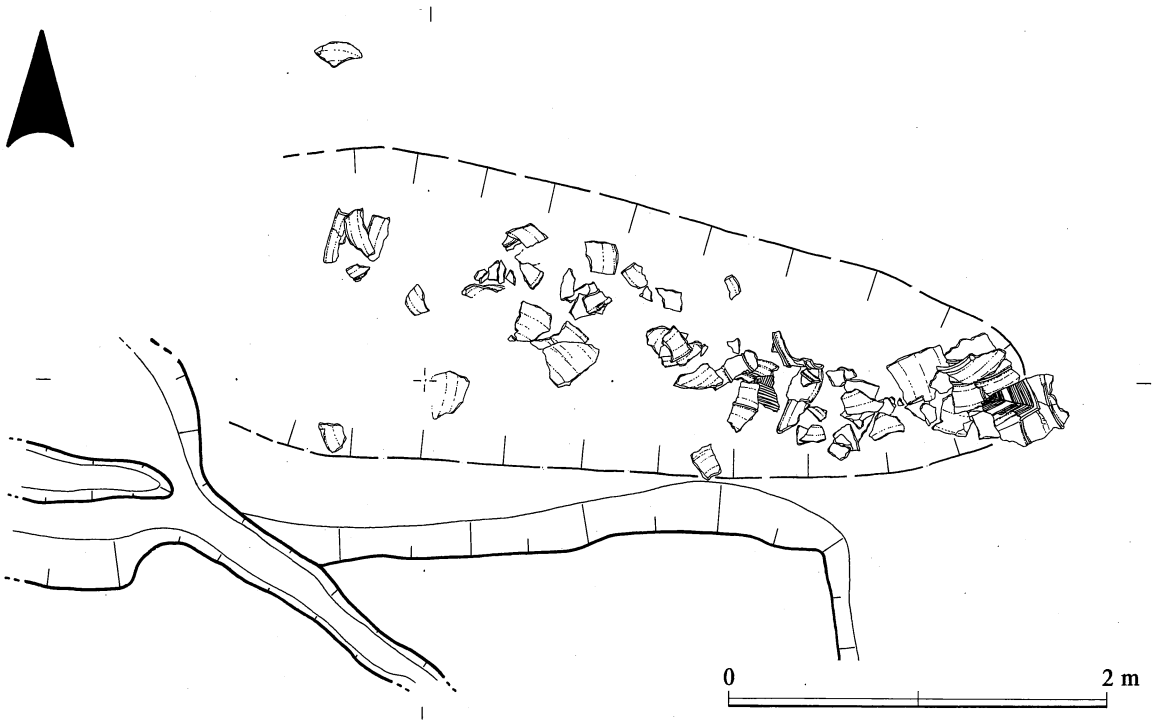


図５　古墳周濠上部における埴輪類出土状況（S＝1/40）

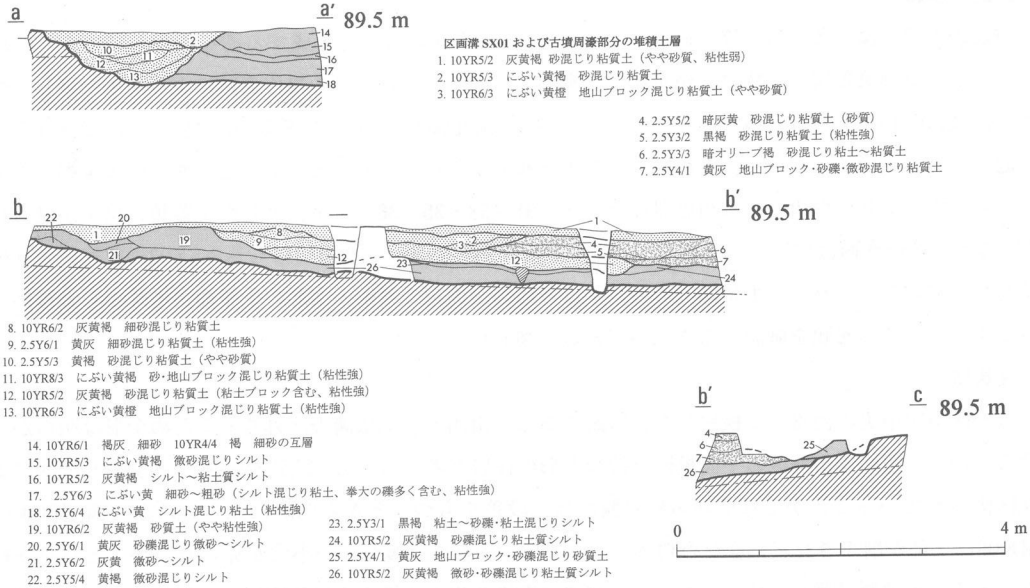


図６　古墳周濠部分における土層断面図（S=1/80）

古墳周濠

調査区北辺に位置する弧状に巡る溝である。上部に後述の埴輪を含む落ち込み、区画溝SX01、落ち込みSX03等が重複しているが、調査区内で南北幅3.0m強、深さ約1.0m弱が周濠埋土として遺存していた。なお、埋土は粗砂や地山ブロック混じり粘質土を基調とした軟質土壌であり、実際には北壁15～20層、東壁20～26層にのみ遺存が認められる。また、埋土下部には拳大以上の礫が多く見られることから葺石石材の流入を示すものかもしれない。これら埋土中には埴輪片や土師器片が多く含まれており、他にも緑色凝灰岩製石釧（図13－**66**）や柳葉形鉄鏃（図13－**67**）が出土している。出土遺物からも墳丘部を後世に削平された古墳の痕跡であることがわかるものである。なお、調査区北壁の土層観察より古墳周濠の最終埋没は多量の粗砂の混じる粘質土壌であり、洪水砂層による埋没が考えられる状況であった（図５－北壁12層）。

古墳周濠上部の落ち込み

古墳周濠埋土の上部より掘り込まれた溝状の落ち込みである。最大幅1.6m、深さは最深部で0.6mを測り、検出長は東西約4.0mである。埋土中には盾形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪を含む多量の埴輪片（図11－**58**～**63**・図12－**64**）と土師器片が落ち込み底面より検出面にかけて折り重なるように出土しており（図５）、砂と地山ブロックを多量に含む粘質土基調の二次堆積様の土壌で埋没していた（図６－８～13層）。こうした検出状況から人為的に複数の埴輪類を廃棄した痕跡として認められるものであり、周濠上面より検出されたことからも周濠埋没後の掘り込みであると層位的に検証されよう。

落ち込みSX02

上面を区画溝SX01により削平されているが、最大幅1.1m、最深部で約0.5mの深さで検出した。埋土は砂と地山ブロックの混じる粘質土であり、多くの埴輪片が出土した周濠上部の落ち込みと同様に土師器、埴輪等の破片が含まれていた。おそらく周濠上部の落ち込みとともに墳丘破壊時の埴輪、土器等の廃棄のために掘削されたものと思われる掘り込みである。

区画溝SX01

前記の古墳周濠、落ち込み等の遺構上部に重複したL字状の区画を形成する溝を検出している。検出面より上位では第Ⅳ層の遺物包含層が直上に堆積しており、中世以降の耕作痕跡による削平が著しいために深度は0.15～0.25mと浅く遺存するものである。南北幅2.0m前後を測るが、北肩については検出時に認識が甘く平面的に検出し得なかったが、土層断面より復元することができた。埋土は灰黄褐色砂混じり粘質土であり、埋土中には須恵器片（図９－**31**～**33**・**35**・**36**）を主体とした土器類の出土が見られた。なお、溝の底面は平均してほぼ水平に近い状況であったが、北西端は落ち込みSX03の重複により破壊を受けている。これらの堆積状況については古墳周濠周辺の東西・南北の土層観察用畔から重複関係を示すかたちでの層順を確認することができる（図６）。

住居跡１

調査区南半中央の西寄りで検出した住居跡である。南側の一部は調査区外であるため全形は明らかではないが、一辺約４ｍ前後の平面規模を持つ方形の住居と考えられる。北辺をSX04、東辺をSD009により区画されていることがそれぞれの外肩側が高く段差をもつことから明瞭に知られるが、西辺区画のSD008は上部が削平されているため判然とはしない。内部には幾つかの小穴が見られるが、どれを支柱穴とするかの判断は難しい状況にあった。前述の壁溝相当の小溝からは須恵器、土師器の小片が微量に出土しているが、明確な帰属時期決定の材料とは成り難い。なお、床面には浅く不整形な落ち込みが多く見られたが、貼り床痕跡として認められるものは無くいずれも古墳墳丘下の前代（弥生後期末～古墳前期初頭）の遺構あるいは遺物包含層の落ち込みと考えられるものであった。SX04の南東側やSX05埋土からは庄内併行期の土器（図９－**45**・**46**）が出土している。

住居跡２

調査区の南西で検出した住居跡様の区画である。全体の平面規模については東西6.5m以上、南北5.0m以上と考えられる。北辺をSD002、東辺を弧状溝SD001に切られた南北小溝で区画される。それぞれの小溝の深度は浅く約0.15m程度であり、埋土中には微量の須恵器、土師器の小片が含まれていた。一応、ここでは住居跡として扱ったが、区画小溝が前記の住居跡１の外周を囲郭するように所在することからこれらを一連の遺構として捉えることも考えられよう。

斜行溝SD003・SD005・SD007

住居跡１・２の上部を切り込むいずれも幅0.3m、深さ0.2～0.4mの小溝である。各溝の埋土からは精良な胎土の土師器や高台の付いた須恵器杯底部の小片等が出土している。SD007埋土からは完形の杯身（図９－**44**）が出土しており、斜行溝全体では概ね７・８世紀の時間幅で機能、埋没したことが窺える。

弧状溝SD001

調査区の北西～南東に弧状に巡る素掘り小溝である。幅0.25～0.3m、深さ0.15～0.35mを測り、北西端に向かって深度を増すような遺存を示している。埋土中より大小の須恵器、土師器の破片が出土しており、南側では半完形の須恵器杯蓋（図９－**42**）、土師器高杯杯部片（図９－**43**）が見られた。なお、この溝の北端は次に記述する落ち込みSX03に連続しており、一体化した遺構として捉えられる。

落ち込みSX03

調査区北辺西側に位置する落ち込みである。古墳周濠、区画溝SX01に重複して掘り込まれた遺構であり、弧状溝SD001と連結した一連の遺構である。落ち込み部分は弧状溝の南端より徐々に低くなっており、この小溝の流れがすべて落ち込みSX03に流れ込むように掘削されていることがわかる。埋土中には

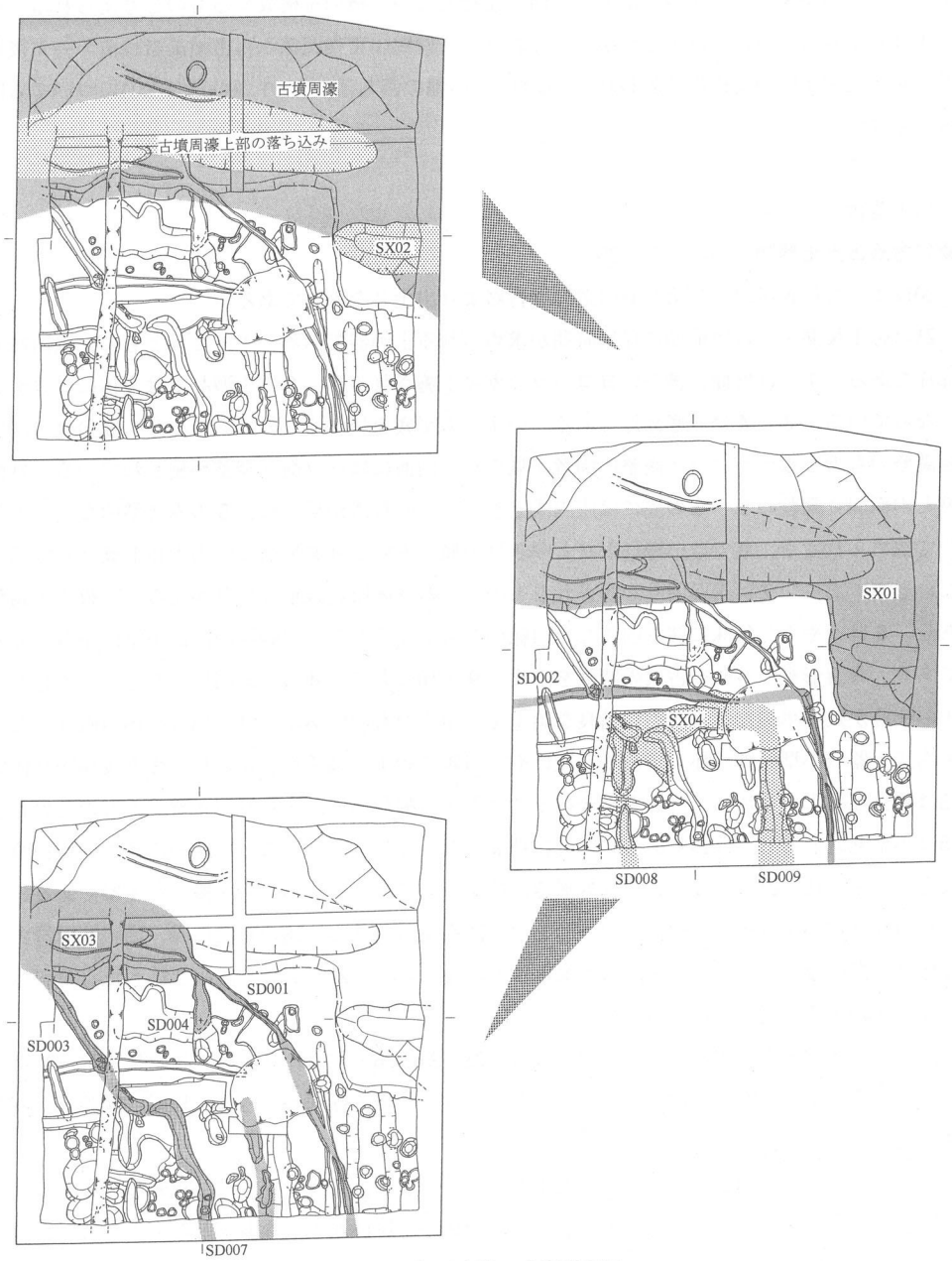


図７　主要遺構の時期別変遷

土師器、須恵器の小片が多く含まれるが、ほとんどは6世紀代の古墳後期に帰属するものであった。

その他の遺構

これまで概観した遺構の他にも小穴、落ち込み等が多く検出されている。小穴は調査区南東隅に等間隔に位置するものが見られ、北西～南東の方向に建物あるいは柵列を構成するものと考えられる。これらはいずれも第Ⅵ層（地山）直上で検出されており、遺構間の重複関係から古墳築造以前の弥生後期末～庄内・布留式初頭頃の遺構群と思われる。なお、その他の落ち込みSO01、SO02、SX05についても同時期と考えられる。

3．出土遺物

遺物包含層出土土器類（図8－1～30）

1～30はすべて第Ⅳ層および第Ⅴ層の遺物包含層より出土したものである。

1～21は弥生後期末～古墳前期に帰属時期が求められる土師器である。1・2はともに二重口縁壷の口縁部片である。1には外面に細かいヨコヘラミガキが施されるが、2の小型品では全体にヨコナデ仕上げとなっている。3・4は壷底部片である。いずれも平底を呈するものである。5～8の甕には外面が叩き調整のものと板ナデ、ハケ調整の両者が見られ、内面にはヘラ削り調整が施されている。外面叩き調整と内面削り調整の5・6の甕には庄内式土器（甕）の特徴が見られ、5のみ典型的な庄内大和形甕として認められるが、6では口縁部形状と叩き目の傾き方向より典型的な庄内大和形甕としては認められないものである。7は内面削りが施されるものの、器壁の厚い鈍重な作りが見られる板ナデ調整の甕である。8はやや立ち気味に緩く内湾した口縁の布留形甕である。口縁端の内面肥厚は小さくて丸いものであり、布留形甕でもやや古式の特徴を示す。9・10は丸底の鉢の口縁部片である。いずれもナデ、指頭圧の痕跡が残る単純な作りでやや精良な胎土を使用したものである。11～13は高杯の破片である。11は庄内式土器（小型低脚高杯）である。12はやや粗雑な胎土と調整痕が見られる弥生後期の高杯である。13は精良な胎土を使用し、外面をタテヘラミガキする脚柱部片であり概ね布留式のものと思われる。14・15は小型丸底壷あるいは鉢である。ともに精製土器となる特徴をもち、形態的には布留式初頭の帰属が限定される。16～21の小片はいずれも形態、胎土ともに特徴的な外来系（搬入）土器である。16の受け口状口縁、17の窪み底はやや白っぽい胎土の近江系土器である。18の有段口縁、19の鼓形器台、20の低脚杯は特徴的な器形から山陰系土器であることが知られる。21の櫛描き直線を施した有段口縁は庄内併行期に帰属する吉備系土器である。

22～27は古墳後期～奈良末期の須恵器片である。22～24・26・27の杯身では5世紀代後半～8世紀代の時期幅がある。また、25の広口壷には口縁内面にヘラ記号様の線刻が見られ、形態、調整等から概ね5世紀末頃の帰属が考えられる。

28～30は中世後期の土師質小皿である。大小の器形があるが、いずれもナデ、指頭圧で成形されている。遺物包含層出土品としたが、遺物包含層上面の素掘り小溝群埋土より混入したものかもしれない。

遺構出土土器類（図9－31～46）

31～36は区画溝SX01埋土より出土した土器類である。31～33・35の須恵器は概ね5世紀末～6世紀代全般の帰属が考えられるものである。なお、34の小片は東海系S字状口縁台付き甕の口縁部小片であるが区画溝埋土への混入品である。

37～39は落ち込みSX02埋土の出土土器類である。37は二重口縁壷、38は小型丸底壷、39はやや小型の

有段屈曲鉢である。いずれも精良な胎土で作られている。

40は落ち込みSX03の埋土出土の高杯である。杯底部から脚柱部にかけて残り明瞭な接合痕跡が看取される。

41は落ち込みSX04埋土より出土の小片である。独特な口縁部形状から東海系S字状口縁台付き甕の一部であることが知られる。

42～44は弧状溝SD001の埋土より出土した土器類である。42・44の須恵器はともにほぼ完形に近い形で出土している。43は杯部と杯底部の間に明瞭な稜が巡る高杯杯部片である。前記の須恵器よりも帰属時期の遡る布留式の高杯である。

45は落ち込みSX05埋土中にあった東海系S字状口縁台付き甕の底部片である。外面にはタテ方向の櫛目状ハケが残り、底面には脚台との接合痕跡が明瞭である。

46は落ち込みSX04の南東部より出土した内面ケズリ調整の布留式傾向甕である。実際には底部まで残るほぼ完形品であったが器壁が約２～３㎜と極端に薄いために復元することができなかった。口縁端

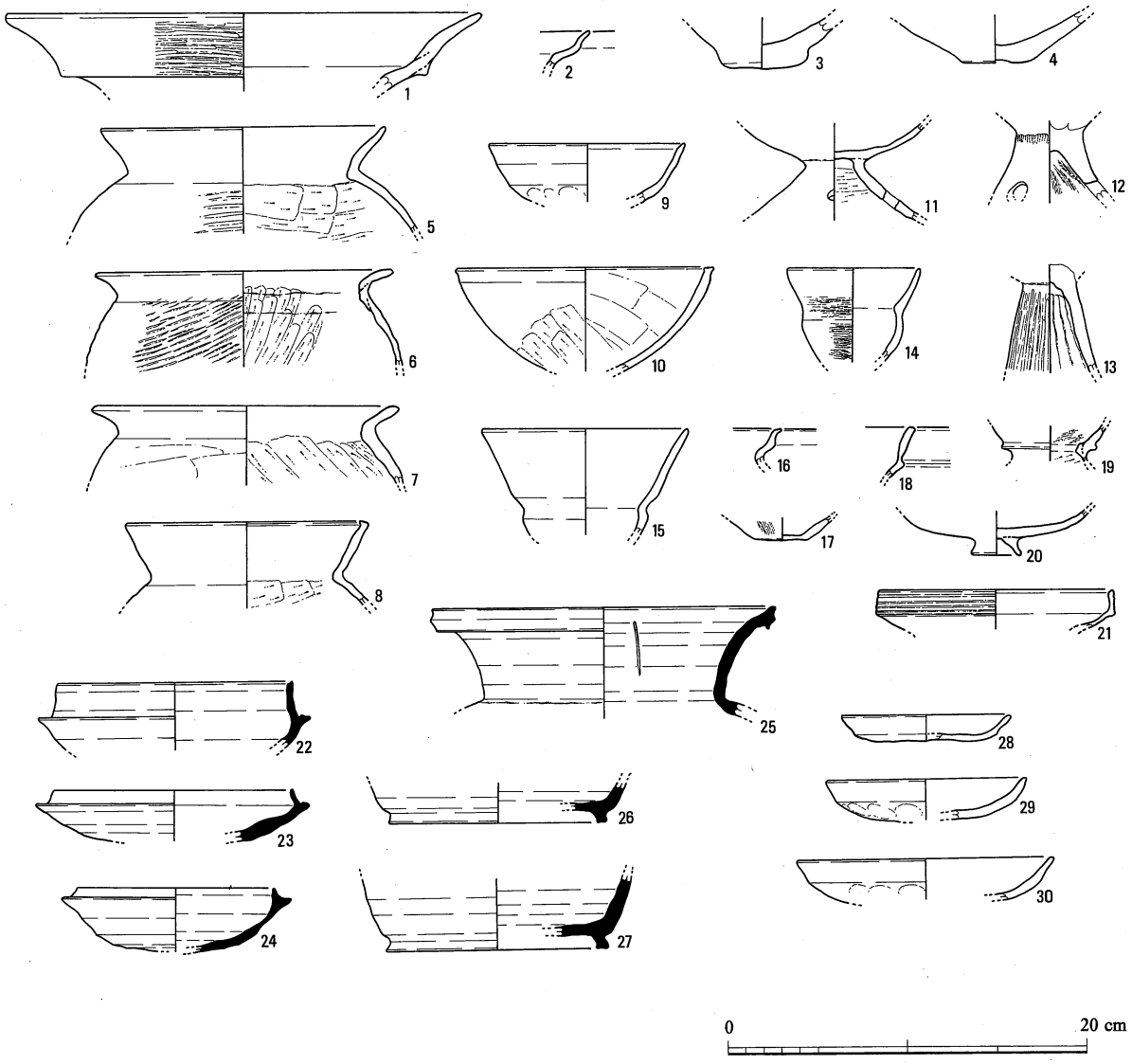


図８　出土土器実測図１（S＝1/4）

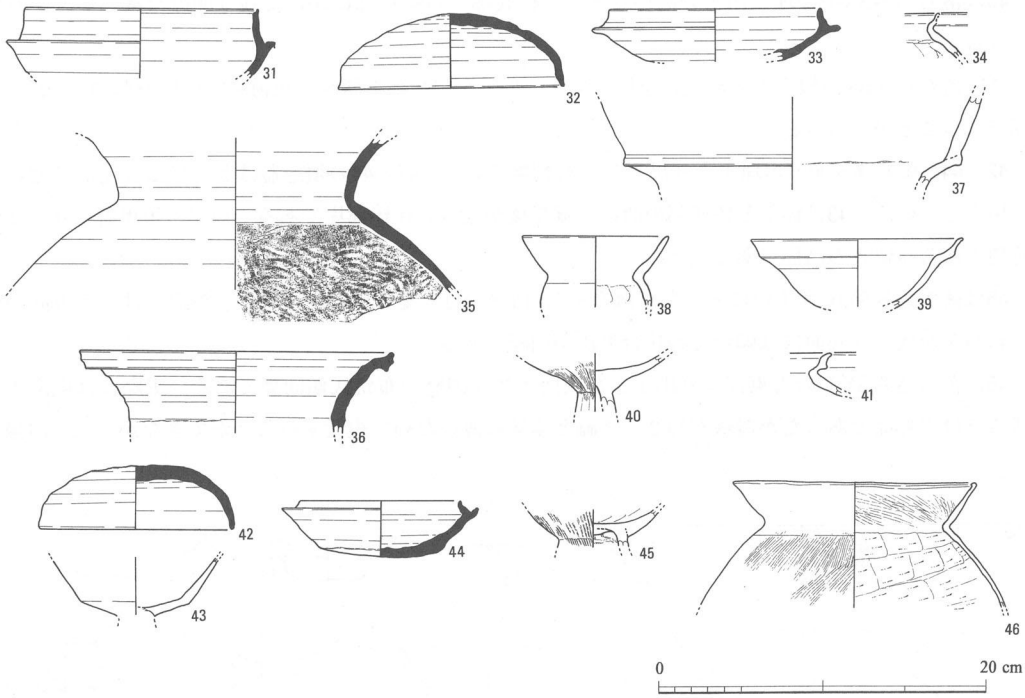


図９　出土土器実測図２（S＝1/4）

部は丸く内側に肥厚し、口縁部内面にナナメハケ、体部外面にタテ・ナナメハケが施されている。定型化した布留形甕に先行する形態、調整手法が認められるものである。

古墳周濠およびその付近の出土土器類（図10－47～57）

47～57は後述する多量の埴輪片と共伴する土器資料である。55～57のような弥生後期末～庄内期の土器片の混入はあるものの、ほぼ布留式古相の土器で占められる点から埴輪類との時間的整合を示す土器と評価できる。47は定型化した布留形甕である。口縁端の内面肥厚と内湾口縁、それに外面のハケが特徴的な明らかに球形胴部を呈するものである。48・49の大小の小型丸底壷はいずれも口縁部が大きく外に開く古相の形態、細かいヨコヘラミガキ調整が見られるものである。50の高杯は中空脚で薄手の脚柱部片である。また、これらの土器とともに外来系土器も出土している。51の有段口縁甕、52の低脚杯はともに山陰系であり、54の内湾口縁壷は東海系の瓢形壷である。

古墳周濠およびその付近の出土埴輪類（図11－58～63・図12－64）

58～64の埴輪類は古墳周濠埋土および周濠埋没後の掘り込みである周濠上部の溝状落ち込みより出土した埴輪片の接合関係を確認したものから選別、図示したものである。

埴輪類の器種組成は、大小の普通円筒埴輪（58～61）、朝顔形埴輪（62・63）、盾形埴輪（64）で構成されており、いずれも外面調整が一次調整のタテハケの後に二次調整のヨコハケを施すものである。全体としては突帯間の間隔が均等な規格性の見られる埴輪類である。

58～61は円筒埴輪である。いずれも突帯は断面矩形を呈し、胴部に長方形透かし孔が穿たれた破片資

料である。なお、これらの破片のうち58～60は周濠上部の落ち込みよりまとまりをもって出土しており同一個体であると思われる埴輪片である。これらの実測図より推定復元した場合に口径47cm前後、底径32cm前後、器高75cm程度の規模の円筒埴輪となる（図11右下復元図）。突帯４条で５段構成となり口縁部付近のみ均等な突帯間隔に比べて短いものとなる形態が窺える。口縁端は58のように短く外反して外端面を突帯様に仕上げている。61は反転復元した実測図であるが、底径が41cmと大型になり、他にも大きな埴輪が存在したことがわかる。

62・63は朝顔形埴輪上部の破片である。62は壷部が外に膨らむ形態のものである。他に接合不可であったが同一個体の破片があり円孔を穿つことが知られる。63の破片は幅の狭い突帯間に小さな円孔が穿たれていた。いずれも口縁部付近まで推定復元した場合に図11右下のような形態が想定されるものである。

64の盾形埴輪は盾部分の一端と接合部分が残るものである。胴部最大幅は約63cmと大きく、口縁部片の復元口径も約72cmと大口径となる。盾部分の大きさは他に出土した盾部の破片（図12右下拓影）から全体規模、意匠を推定して考えた時に横幅60cm強程度と復元可能であった。縦幅にはやや不安が残るが87cm弱と推定できる。なお、全体の形状については口縁部の反転復元実測図と64の図を合成し、盾面と突帯間隔から考えた想定復元を図12左下に示しておいた。これによると８条突帯で９段構成の器高約1.7m近い大型の埴輪となる。

以上の埴輪類で特筆すべき点として64の盾形埴輪の盾面上部の突帯に見られる刺突痕跡を指摘することができる。盾形埴輪の盾部は盾面中央付近を円筒部に貼り付けその曲面に一体化させてはいるが、左右の側縁については円筒部より板状の盾面側縁が張り出すかたちとなる。そのために突帯部分と盾面の粘土板との間、それに盾面上端隅の粘土板と円筒部との間に支えとなる三角形の粘土部材を貼り付け補強している。先に挙げた突帯下面の刺突痕跡は盾面側縁端の垂直線上の直上に下方から棒状工具の刺突痕跡が見られるものであり、おそらく盾部と円筒埴輪の一体接合時の製作過程に関わるものと考えられ

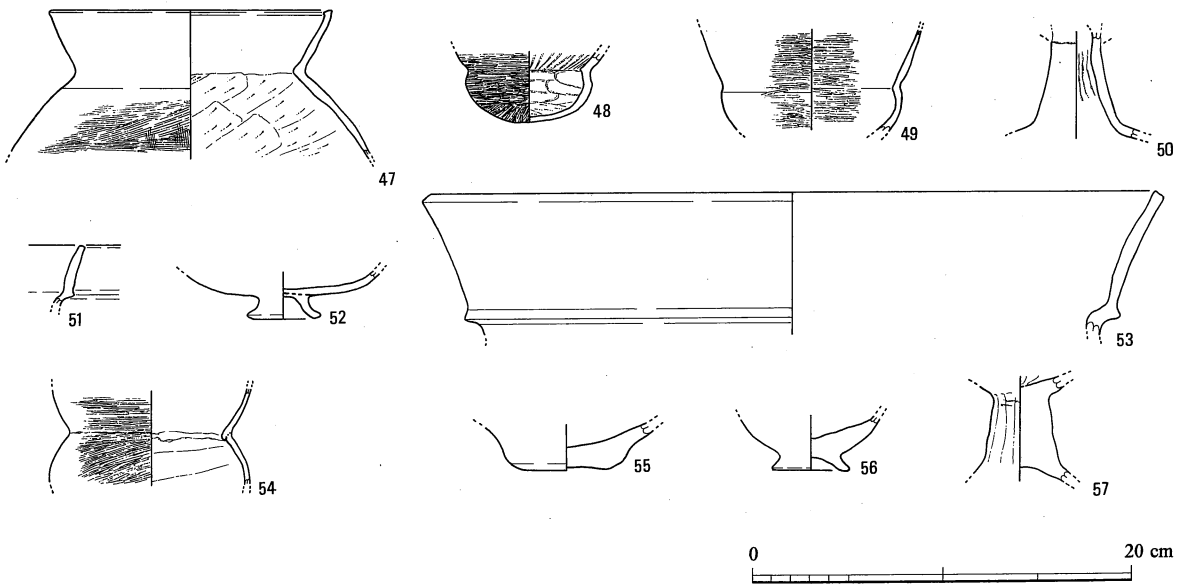


図10　出土土器実測図３（S＝1/4）

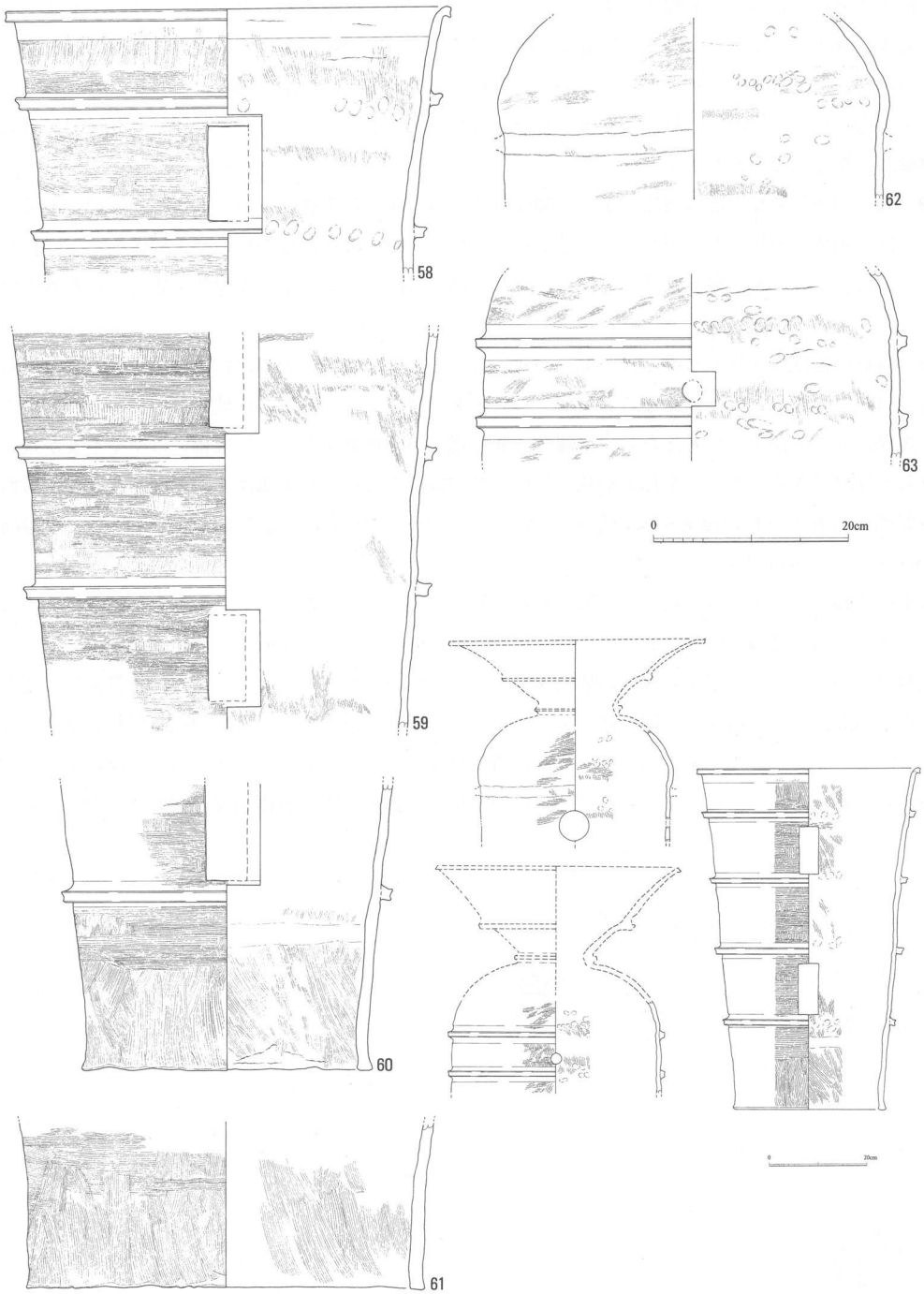


図11　埴輪類　実測図１（S=1/6・形態復元図：S=1/12）

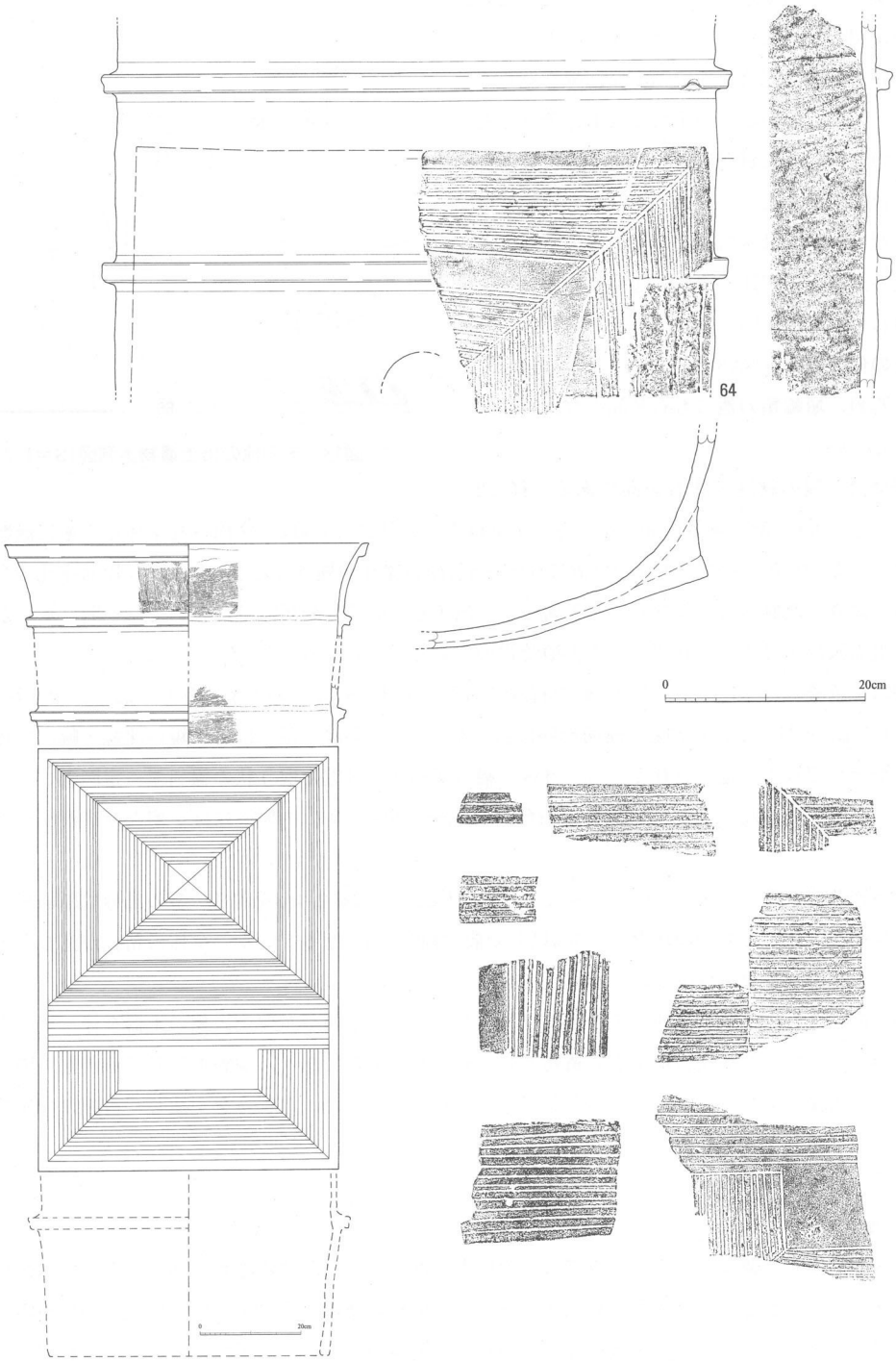


図12　埴輪類　実測図２（S=1/6・形態復元図：S=1/12）

よう。

以上のように、埴輪類についてその組成を示せるように資料提示をおこなったが、突帯接合、付加に関わる技法についてはわずかに円形、方形の刺突痕跡を認めた他に幅広な凹線を巡らすものも確認している。いずれにせよ、そうした技法の看取できた資料は少なくここでは参考程度に留めておきたい。また、これらの埴輪の帰属時期については古墳周濠埋土出土の土器、その他の遺物との関連と現状の埴輪類の編年観より概ね4世紀中葉頃と考えておきたい。

その他の遺物（図13）

土器類、埴輪類の他にも石製品や金属製品が出土している。

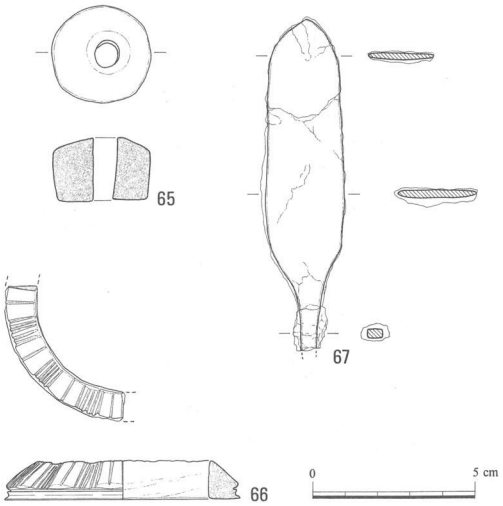


図13　その他の出土遺物実測図（S＝1/2）

65は滑石製の紡錘車状石製品である。径3.2cm、高さ2.0cmを測り重量約30ｇを測る。上面はドーム状に0.4cmほど突出させ全体を丁寧に研磨して仕上げている。中央よりややずれた位置に径0.7cm前後の穿孔が施されるが、上面より片面穿孔で穿たれている。調査区北側の遺物包含層（第Ⅳ層）より出土している。帰属時期については不明であるが、後述の古墳周濠出土品よりは時期の下る古墳時代のものと考えられる。

66は緑色凝灰岩（グリーンタフ）製の石釧である。全体の約4分の1が遺存しており、復元径約7.4cm、器高1.2cm、重量約7ｇを測る。断面形状は台形を呈し、外側縁下部には深く鋭い沈線と幅広で稜を示す凹線がそれぞれ1条巡らされている。外縁上端の斜側面には匙面取り状の線刻で一定間隔ごとに凹凸を施して装飾的な意匠を表現している。内径は約5.3cmと復元され、内側縁には丁寧な研磨痕跡が看取される。

67は柳葉形鉄鏃である。現存部の全長10.2cm、刃部の最大幅2.4cmを測る。茎の部分は断面長方形を呈し、先端を欠損するものの現存長1.5cm以上で最大幅0.4cmとなっている。全体に錆化が進むため正確さを欠くが、刃部の厚さは0.2～0.3cm程度である。

66・67はともに古墳周濠埋土の上半より検出しており、埴輪や布留式古相の土器を伴って出土したものである。いずれも前期古墳の副葬遺物として知られる遺物であり、調査地における前期古墳の墳丘破壊に伴い周濠に廃棄、流入したものとして考えられよう。また、これらを一括して古墳に帰属する遺物として捉えることが可能である。

Ⅲ．まとめ

今回の柳本立花遺跡における調査では、前期古墳群の周辺における調査であったためその前後の時期の集落の存在を想定して調査を進めたが、意外にも墳丘の破壊、削平を受けた埋没前期古墳の周濠を検出することができた。また、重複関係をもつ多くの遺構の在り方から当地における土地利用の変遷を知ることとなった点は狭小な調査面積にも拘らず成果の大きい調査となった。

ここでは今回の成果について遺構の変遷、古墳の評価等に重点をおきつつまとめておきたい。

遺構の変遷（図７参照）

当地における時期の遡る明確な遺構は調査区南東隅の柱穴群である。他に幾つかの不整形な浅い落ち込みが地山面直上で検出されており、いずれも弥生後期末～布留式初頭の土器が出土している。これらは次の前期古墳の墳丘下に展開していた集落の一角に該当するものと思われる。

次に前期古墳の時期となるが、古墳周濠出土遺物の様相から前期前半の古墳であることが知られた。調査区内での検出部分が弧状を成す周濠のごく一部であったため、墳形、規模については不明と言わざるを得ないが、周辺地形や現状の地割り等からの検討により前方後円墳とも考えられる。また、副葬遺物や埴輪類の様相からも近在する上ノ山古墳や天神山古墳と同規模の古墳であったかもしれない。また、この古墳周濠は土砂、洪水砂等の流入により築造後100～150年にして自然埋没しているが、その後墳丘の部分的破壊とともに樹立埴輪の廃棄のために掘り返されたようである。その時期については古墳帰属の遺物以外に見当たらないため不明であるが、上部重複遺構との関係により５世紀半ば頃と考えられる。

その後、墳丘の小高い部分に竪穴住居が構築され、この周囲を区画する方形の区画溝が掘削される。これらの性格については不明であるが古墳後期、５世紀後半代の一般集落であったと思われる。そして、住居、区画溝の埋没後は住居の立地する低丘の縁辺に弧状溝が巡らされ先の古墳墳丘の中心に近く墳丘残存部への破壊が再び進行したと推定される。こうした行為は概ね６世紀前後と考えておきたい。

７世紀前後にはさらに様相は一変し、幾つかの斜行溝が遺構として認められるが中心となるのは調査区南方の先の古墳墳丘中心部に近い微高地上であろう。その後も遺物包含層中には奈良時代までの土器片が見られるために７世紀以降にも集落の展開が予想されるが、中世以後は完全に耕地化が進み近現代までの景観に近くなった様子が考えられる。

以上のように、遺構の在り方から当調査地における土地利用の変遷が窺い知れる。

埋没古墳について

報文あるいは前項でも触れたように、埋没古墳については前期の大型古墳の一角を検出したに過ぎないため墳形、規模については想像の域を脱するものではない。帰属時期については埴輪と副葬遺物により４世紀中頃と思われるが、同時期の周辺所在の古墳との相関関係から考えられる事柄は多い。当調査地周辺の柳本古墳群では東側に多くの大型前期古墳が所在し、西側にはやや規模の小さい石名塚古墳、柳本大塚古墳等が現存する。つまり立地基盤の良好な丘陵上の地点から西方の丘陵末端付近に散在するものまで規模の上での序列を見るようなかたちでの展開で分布する。今回の調査地近辺にも条里地割の乱れに微高地が見られる地点もあり、今回と同様に古墳であった可能性も考えられよう。こうした古墳立地の推移と規模の序列が被葬者間の階層差を表わすことも否定できないであろう。いずれにせよ、今後も偶然にこうした埋没前期古墳が検出されることが予想されるが、それだけに密集度の高い地域であったことは同時期の奈良北部の佐紀古墳群における大型古墳周辺での古墳の展開とともに様々な点での比較検討材料となるであろう。

表　出土土器類観察表

番号	器　種	法量(cm)	調整手法	色　調	胎土	焼成	残　存　率	層位・遺構名
1	二重口縁壷	復元口径　26.6	外面　ヨコナデ・ヨコ方向のミガキ	5YR6/8橙	密	良好	口縁部　約1/8	Ⅴ層
		残存高　4.3	内面　ナデ					
2	二重口縁壷	－	外面　ヨコナデ	5YR7/6橙	密	良好	口縁部　細片	Ⅴ層下部
		－	内面　ヨコナデ					
3	壷	底径　4.4	外面　ナデ	2.5Y7/2灰黄	やや粗	良好	底部　ほぼ完存	Ⅴ層下部
		残存高　2.8	内面　ナデ					
4	壷	復元底径　3.2	外面　ナデ？	7.5YR8/4浅黄橙	やや粗	良好	底部　完存	Ⅴ層
		残存高　2.8	内面　ナデ？					
5	甕	復元口径　15.8	外面　ヨコナデ・タタキ	7.5YR6/6橙	密	良好	口縁部　1/16(胴部1/8)	Ⅴ層下部
		残存高　6.0	内面　ヨコナデ・ケズリ					
6	甕	復元口径　16.4	外面　ヨコナデ・タタキ	7.5YR7/3にぶい橙	密	良好	口縁部　1/16以下(胴部1/8)	Ⅳ層
		残存高　5.4	内面　ヨコナデ・ナデ・ケズリ					
7	甕	復元口径　17.0	外面　ヨコナデ・板ナデ	5YR7/4にぶい橙	やや粗	良好	口縁部　約1/5	Ⅴ層
		残存高　4.3	内面　ヨコナデ・ケズリ					
8	甕	復元口径　13.2	外面　ヨコナデ・ハケ・ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	やや密	良好	口縁部　1/16	Ⅴ層
		残存高　4.7	内面　ヨコナデ・ケズリ					
9	鉢	復元口径　10.8	外面　ヨコナデ・指頭圧	7.5YR6/4にぶい橙	密	良好	口縁部　1/8	Ⅴ層下部
		残存高　3.2	内面　ヨコナデ					
10	鉢	復元口径　14.4	外面　ヨコナデ・ケズリ	5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良好	口縁部　1/8	Ⅴ層
		残存高　5.7	内面　ヨコナデ・板ナデ					
11	高杯	－	外面　ナデ？	5YR7/4にぶい橙	やや粗	良好	杯部と脚部の接部　完存	Ⅴ層
		残存高　5.3	内面　(脚部)ケズリ					
12	高杯	－	外面　タテハケ	10YR8/4浅黄橙	密	良好	杯部　欠損(脚部1/2)	Ⅴ層
		残存高　4.5	内面　タテハケ					
13	高杯	－	外面　タテ方向のミガキ	2.5YR6/8橙	密	良好	杯部　欠損	Ⅴ層
		復元口径　6.0	内面　しぼり目					
14	小型丸底壷	復元口径　7.4	外面　ヨコナデ・ヨコ方向のミガキ	5YR7/4にぶい橙	密	良好	口縁部　1/8	Ⅳ～Ⅴ層
		残存高　5.2	内面　ヨコナデ					
15	小型丸底壷	復元口径　11.4	外面　ヨコナデ？	5YR6/8橙	密　精良	良好	口縁部　1/8	Ⅴ層下部
		残存高　5.9	内面　ヨコナデ？					
16	近江系・甕	－	外面　ヨコナデ？	10YR7/1灰白	密	良好	口縁部　細片	Ⅴ層
		－	内面　ヨコナデ？					
17	近江系・甕	復元底径　2.8	外面　タテハケ	10YR8/4浅黄橙	密	良好	底部　約2/3	Ⅴ層
		残存高　1.3	内面　ナデ					
18	山陰系・甕	－	外面　ヨコナデ	2.5YR6/6橙	やや密	良好	口縁部　細片	Ⅴ層
		－	内面　ヨコナデ					
19	山陰系・鼓形器台	－	外面　ヨコナデ	5YR4/3にぶい赤褐	密　精良	良好	口縁・底部　欠損	Ⅴ層下部
		残存高　2.0	内面　ヨコハケ・ケズリ					
20	山陰系・低脚杯	底径　2.8	外面　？	7.5YR6/6橙	密	良好	底部　完存(杯部欠損)	Ⅴ層
		残存高　2.3	内面　？					
21	吉備系・甕	復元口径　13.0	外面　ヨコナデ・擬凹線	2.5YR5/4にぶい赤褐	密	良好	口縁部　約1/8	Ⅴ層
		残存高　2.2	内面　ヨコナデ					
22	須恵器・身	復元口径　13.0	外面　ロクロナデ	N5/灰	密　精良	良好	口縁部　1/8	Ⅴ層
		残存高　3.7	内面　ロクロナデ					
23	須恵器・身	復元口径　13.2	外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	5Y6/1灰	密　精良	良好	口縁部　1/5	Ⅴ層
		残存高　2.8	内面　ロクロナデ					
24	須恵器・身	復元口径　11.0	外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	10YR5/1灰	密　精良	良好	口縁部　1/4	Ⅴ層(素掘り溝含む)
		残存高　3.5	内面　ロクロナデ					
25	須恵器・甕	復元口径　19.2	外面　ロクロナデ	N5/灰	密	良好	口縁部　1/8	Ⅴ層
		残存高　6.1	内面　ロクロナデ					
26	須恵器・杯	復元底径　12.0	外面　ロクロナデ・ナデ	2.5Y6/1黄灰	密	良好	底部　1/8(口縁部欠損)	Ⅲ～Ⅴ層
		残存高　2.4	内面　ロクロナデ・ナデ					
27	須恵器・杯	復元底径　12.4	外面　ロクロナデ・ナデ	2.5Y7/2黄灰	密	良好	底部　1/8(口縁部欠損)	Ⅲ～Ⅴ層
		残存高　4.0	内面　ロクロナデ・ナデ					
28	土師皿	復元口径　9.4	外面　ヨコナデ・指頭圧	10YR7/2にぶい黄橙	密　精良	良好	口縁部　2/3	Ⅴ層(素掘り溝含む)
		残存高　1.9	内面　ヨコナデ					
29	土師皿	復元口径　11.2	外面　ヨコナデ・指頭圧	10YR5/3にぶい黄褐	やや密	良好	口縁部　1/8	Ⅲ～Ⅴ層
		残存高　2.3	内面　ヨコナデ・ナデ					

番号	器　種	法量(cm)	調整手法	色　調	胎土	焼成	残　存　率	層位・遺構名
30	土師皿	復元口径　14.2	外面　ヨコナデ・指頭圧	2.5YR6/3にぶい黄	密　精良	良好	口縁部　1/8	Ⅳ～Ⅴ層
		残存高　2.2	内面　ヨコナデ・ナデ					
31	須恵器・身	復元口径　14.2	外面　ロクロナデ	5Y6/1灰	密	良好	口縁部　1/2	SX－01埋土
		残存高　4.2	内面　ロクロナデ					
32	須恵器・蓋	復元口径　13.6	外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	N6/灰	密　精密	良好	口縁部　約2/3	SX－01埋土
		残存高　4.5	内面　ロクロナデ・ナデ					
33	須恵器・身	復元口径　12.8	外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	5Y6/1灰	密	良好	口縁部　約1/8	SX－01埋土
		残存高　3.2	内面　ロクロナデ					
34	東海系・甕	－	外面　ヨコナデ・タテハケ・ヨコハケ	10YR8/2灰白	密	良好	口縁部　細片	SX－01埋土上面～上層
		－	内面　ヨコナデ・ナデ・板ナデ					
35	須恵器・甕	－	外面　ロクロナデ・タタキ	5Y6/1灰	密	良好	口縁部　欠損(頸部約1/4)	SX－01埋土
		残存高　9.4	内面　ロクロナデ・同心円のタタキ					
36	須恵器・甕	復元口径　19.2	外面　ロクロナデ	N5/灰	密　精良	良好	口縁部　1/6	SX－01埋土
		残存高　4.9	内面　ロクロナデ					
37	二重口縁壷	－	外面　ヨコナデ	7.5YR4/3褐	やや密	良好	口縁部　欠損(擬口縁部1/8)	SX－02埋土
		残存高　5.6	内面　ヨコナデ					
38	小型丸底壷	復元口径　9.0	外面　ヨコナデ	7.5YR7/4にぶい橙	密	良好	口縁部　1/8	SX－02埋土
		残存高　4.3	内面　板ナデ					
3	二段屈曲鉢	復元口径　12.3	外面　ヨコナデ	7.5YR5/4にぶい褐	密	良好	口縁部　1/8弱	SX－02埋土
		残存高　3.6	内面　ヨコナデ					
40	高杯	－	外面　タテ方向のハケ	2.5YR5/6明断褐	密	良好	杯部と脚部の接合部	SX－03埋土
		残存高　3.5	内面　？					
41	東海系・甕	－	外面　ヨコナデ・斜めハケ	10YR5/1褐灰	密	良好	口縁部　細片	SX－04(東西溝部分)
		－	内面　ヨコナデ・ケズリ					
42	須恵器・蓋	復元口径　11.8	外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	10Y6/1灰	密　精良	良好	口縁部　3/4	弧状溝SD－001
		残存高　3.9	内面　ロクロナデ					
43	高杯	－	外面　ナデ・板ナデ	2.5YR6/8橙	密	良好	口縁部・脚部　欠損	弧状溝SD－001
		残存高　3.4	内面　？					
44	須恵器・身	口径　9.8	外面　ロクロナデ・ヘラケズリ	10Y6/灰	密　精良	良好	完存	弧状溝SD－007
		器高　2.8	内面　ロクロナデ					
45	東海系・甕	－	外面　タテハケ	10YR8/3浅黄橙	密	良好	底部と脚部の接合部	SX－05埋土
		残存高　2.3	内面　板ナデ？　(脚部)指ナデ					
46	布留傾向甕	復元口径　14.8	外面　ヨコナデ・斜めハケ	7.5YR6/4にぶい橙	やや密	良好	口縁部　5/6	SX－04南東
		残存高　7.5	内面　ケズリ・ハケ					
47	甕	復元口径　14.8	外面　ヨコナデ・ヨコハケ・タテハケ	7.5YR6/3にぶい褐	密	良好	口縁部　1/8	周濠上部溝状落ち込み
		残存高　7.9	内面　ヨコナデ・ケズリ					
48	小型丸底壷	－	外面　ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	2.5YR6/8橙	密	良好	口縁部　欠損(底部完存)	古墳周濠埋土上～中層
		残存高　3.7	内面　ミガキ・ケズリ・ナデ					
49	小型丸底壷	－	外面　ヨコナデ・ミガキ	5YR5/8明赤褐	密	良好	口縁部・底部　欠損	古墳周濠埋土上～中層
		残存高　5.3	内面　ヨコナデ・ミガキ・ナデ					
50	高杯	－	外面　？	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	良好	脚部 完存(底部・口縁部欠損)	周濠上部溝状落ち込み
		残存高　5.7	内面　？・しぼり					
51	山陰系・甕	－	外面　ヨコナデ	5YR6/6橙	密	良好	口縁部　細片	古墳周濠埋土中～下層
		－	内面　ヨコナデ					
52	山陰系・低脚杯	底径　3.8	外面　？	5YR6/6橙	密	良好	脚部　完存	周濠上部溝状落ち込み
		残存高　2.5	内面　？					
53	山陰系・大型鉢	復元口径　38.2	外面　？	10YR7/4にぶい橙	粗	良好	口縁部　1/16	周濠上部溝状落ち込み
		残存高　7.5	内面　？					
54	小型丸底壷	－	外面　ヨコナデ・ミガキ	2.5YR6/8橙	密	良好	口縁部・底部 欠損(頸部1/3)	古墳周濠埋土中～下層
		残存高　5.1	内面　ケズリ・ナデ					
55	壷？	底径　6.0	外面　？	10YR6/2灰黄褐	やや粗	良好	底部　ほぼ完存	周濠上部溝状落ち込み
		残存高　2.4	内面　？					
56	台付き鉢	底径　4.0	外面　ヨコナデ？	7.5YR6/4にぶい橙	密	良好	底部　ほぼ完存	SX-01埋土・古墳周濠埋土上～中層
		残存高　2.9	内面　ナデ？					
57	高杯	－	外面　ケズリ・ナデ	5YR6/6橙	密	良好	脚部　完存(底部欠損)	古墳周濠埋土中～下層
		残存高　5.6	内面　ナデ					

ヲカタ塚古墳の調査

Ⅰ．はじめに

1．調査の契機と経過

天理市東部の山麓沿いには多くの古墳が分布している。このうち南側の柳本古墳群は西方の丘稜端付近にまで展開する。今回の調査対象としたヲカタ塚古墳は山麓沿いに所在する櫛山古墳、渋谷行燈山古墳（崇神陵古墳）の立地する丘陵の南に谷を挟んで近接する低丘陵上部の標高145m前後の地点に立地する。このヲカタ塚古墳については1981年発刊の『磯城・磐余地域の前方後円墳』に測量図と当時の知見が記されているが、この段階でも墳形や時期等に不明な点が多いことが知られる。

近年、このヲカタ塚古墳墳丘東側周縁部に所在するカマトギ池の水位の増減に伴う墳丘裾への浸食により崩落、崩壊が著しく認められるようになったため、地元の渋谷町より護岸工事施工の要望が叫ばれており、将来的な工事に備えて事前に当古墳の範囲確認と遺存状況把握を目的とした発掘調査を実施する必要が生じ、今年度の調査実施に至った。調査は墳丘東側の池岸上部の平坦地より池岸にかけての幅２ｍを基調とした調査区を３ヶ所に設定して実施した。その後、調査の進行に従い、本来の墳丘盛土層の遺存がかなり内側に深く残ることを確認したため、調査トレンチ内の幅１ｍの深堀り部分のみでの断面観察主体の調査に限定することとなった。なお、現地における調査は平成13年２月14日より開始し同年３月13日にすべての調査に係る作業を完了した。

2．周辺の遺跡

当古墳の周辺では、北西に谷筋を挟んで多量の石製腕飾類出土と玉石を敷いた祭祀遺構で知られる櫛山古墳が所在し、その南辺には遺物散布地（図14－2）と小規模な後期古墳群（薬師山１～３号墳）、南西に山田遺跡（図14－３）等の弥生末～古墳前期の遺物散布地等の周知の遺跡が確認されている。また、ヲカタ塚古墳の北側にも古墳後期の遺物散布地（図14－１）が所在する。

図14　遺跡の位置図（S＝1/5000）

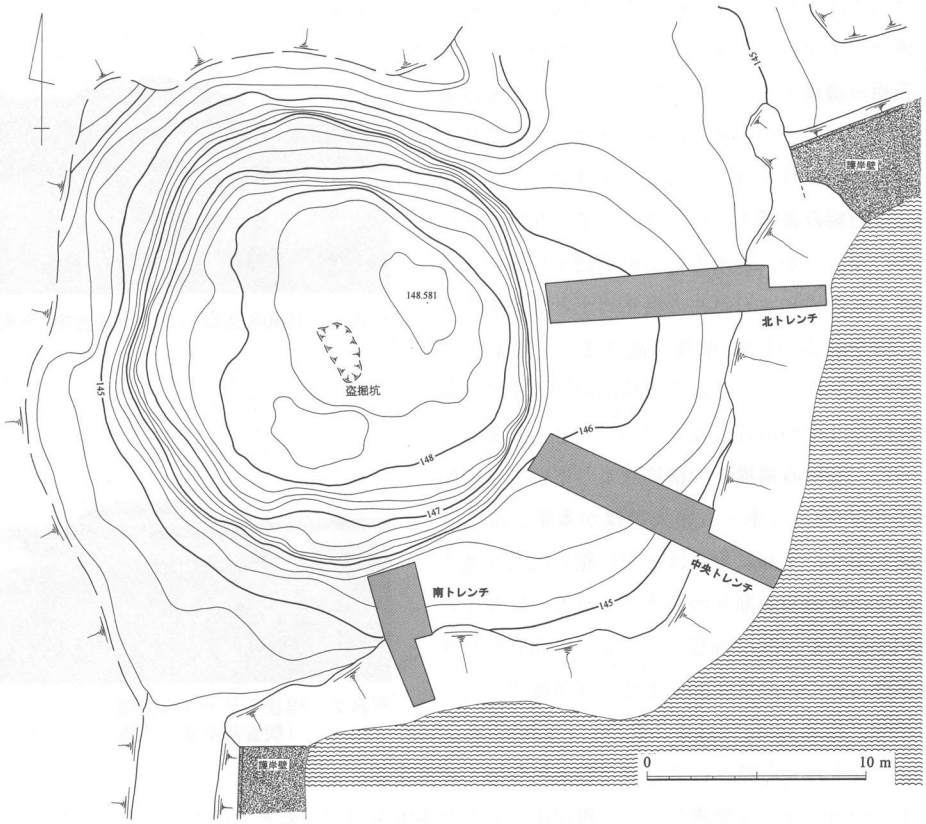


図15　墳丘測量図および各調査トレンチ位置図(S=1/300)

Ⅱ．調査の概要

調査にかかる以前より墳丘周囲の状況は近世以降の近接するカマトギ池の開削や堤の構築荷より著しく改変されていることが知られた。以前の測量調査報告（奈良県立橿原考古学研究所編『磯城・磐余の前方後円墳』）では、今回の調査地にある円丘とその外周縁を径約45mで高さ約７mの二段築成が成された後円部と見做し、標高141m前後の等高線をたどれば北東に向く短い前方部が取り付く全長約55mの帆立貝式前方後円墳であるとの見解が示されている。また、築造時期は不明であるが、墳丘斜面には葺石の遺存が見られることが報告されている。今回の調査直前に池岸周囲の雑草、雑木の伐採、除草を実施した後の現状の墳丘裾崖面でも、拳大、人頭大程度の礫の露出する部分が数ヶ所で認められていた。以下各トレンチごとに調査概要を記しておく。

１．北トレンチ

円丘部裾の平坦面に張り出す標高146mの等高線に直交するように設定した東西方向の調査区である。すべての調査区ともに、当初より本来の墳丘盛土の遺存が確認できる深度までの掘削を進行したが、北トレンチでは標高145.2m前後の高さで平坦面を検出し、布掘り状の溝掘り方に構築された直線的な**石列１**を検出したためにこの面までは確実に後世の破壊が及ぶことが確認できた。南壁土層断面の観察では北トレンチ１～７層の上部堆積土層直下までの撹乱土層の重層が耕作に伴うものであり、先述の**石列１**がこれに伴う暗渠排水路を兼ねた円丘裾との間を区画する施設であることが考えられた。この耕作面

以下では調査区南側縁の深堀りによる土層断面の観察荷より確認作業を進めたが、その途中で西南側に面を揃えた**石組み遺構１**の一部を検出した。この**石組み遺構１**より西では、その内側の囲郭内部埋没時の堆積が南壁10・11層の粘質土壌によることを確認できた。墳丘裾側では**石組み遺構１**を境にさらに深い深度で層序確認をおこなったが、結果として南壁12～15層の多量の小礫混じり土による石組みの裏込め土と構築面直下の整地土層を標高144.3m前後の高さまでで確認することとなった。従って、これらの検出面近くまでは確実に人為的な改変が墳丘に及んでいたことを知るところとなった。**石組み遺構１**の構築面より下位では層厚0.8m以上にわたって拳～人頭大の礫が多量に混じる砂質土壌となり、下部になるほど密に礫の混入が認められた。ここまでの深堀りの深度が２m近くに及んだため掘削作業の安全面に留意してここでの調査を断念し、池岸縁辺近くの現状崖面で下部の層序確認をおこなった結果、標高143m付近まで南壁17～23層の粘土、粘質土、シルトの互層積みによる墳丘盛土層を漸く確認することができた。

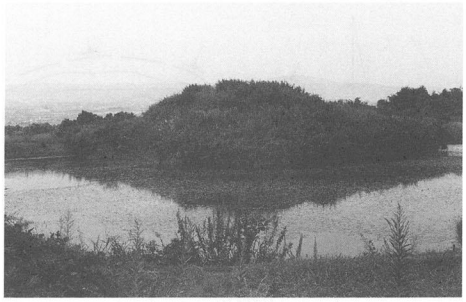


写真１　1990年当時のヲカタ塚古墳（南東から）

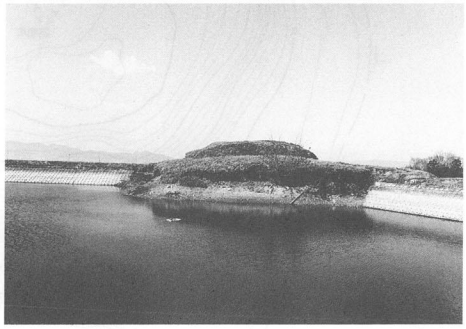


写真２　現状のヲカタ塚古墳
（調査前全景・南東から）

ここまでの層序を再度整理しつつ、現況確認できた事実を列記すると次のようになる。現状の池岸近くの墳裾では標高143m以下に墳丘盛土の遺存が認められ、その上部では標高145m前後までに**石組み遺構１**およびその構築面と**石列１**検出面から知れる耕作面の存在により、２時期にわたる墳丘の改変が窺い知れたわけで、その後は上部堆積土層の堆積を経て現状の地形を成していたことが判明した。なお、ここまでに各層での遺物の出土は微量であり、各遺構の構築時期については明確な判断材料が得られなかったために特定はできなかった。上部堆積土層からは多くの土器片が出土したが、弥生後期末～古墳後期までの時期幅が知られたに過ぎなかった。

２．中央トレンチ

円丘の中心からほぼ南東の方向に延長させて設定した調査区である。円丘裾平坦地の標高146m以下の部分に設定し、東南端の崖面下の池岸までに延長させて調査を進めた。現地表面下約1.0mの標高144m付近までの南壁土層１～７層の上部堆積土層の下面ではほぼ水平な面を呈し、**石組み遺構２**の上端部の直線的な石列を検出している。この検出面では**石組み遺構２**の石列を境に円丘側と斜面側での下面堆積土が異なった様相を示していたため、調査区南半の深堀りによる層序確認でその後の調査を進めた。斜面側では南壁８～11層の直下で**石組み遺構２**の基底面を検出し、人頭大から最大約50cm幅の大型の礫を積み重ねた池側に面を揃えた石垣の構築を確認している。従って円丘側ではその裏込め土となることを南壁12～16層により確かめることとなった。円丘側ではここまでの層位確認のみに留めたが、以後は**石組み遺構２**の構築面より下位の層序把握のために引き続き深堀りをおこなった。そして、南壁17～24層まで本来の墳丘盛土となる人為的な積み上げ土層を漸く確認することとなった。墳丘盛土層の掘り下

げ途中では東西約３ｍ程にわたる人頭大の礫の密集する平坦部を検出したため、調査はここまでの層序確認に留めておくことにした。なお、池岸に近い裾部では前記の石組みの構築面と連続した墳丘盛土層直上の砂層堆積除去後に拳～人頭大の礫による直線的な**石列２**を検出した。

石組み遺構２と**石列２**の構築面の高さで大きく違う点はあったが、ほぼ併行した位置関係を示し、両遺構ともに墳丘盛土面を削平してその上面に構築、配置されることより考えて墳丘改変の際に設置された遺構であることが知られた。また、墳丘盛土層中の礫群については、検出当初は下位にも石組み等の構築物の存在を考えたが墳裾側の堆積層との違いは認められなかったため、同一堆積層中に人為的に混入させたものと思われる状況を呈していた。

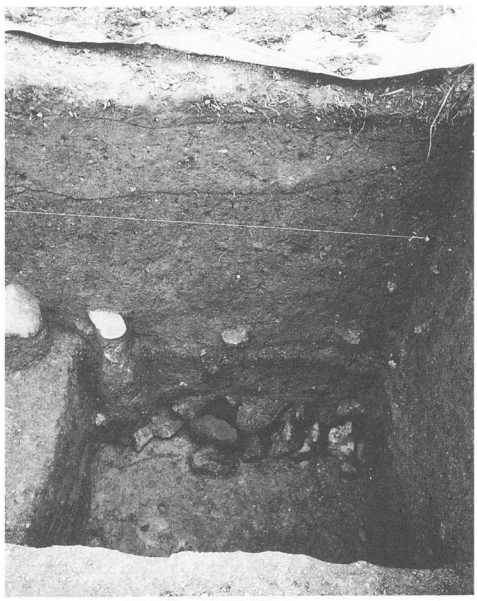


写真３　北トレンチ西端南壁土層断面（北から）

３．南トレンチ

円丘の南裾から池岸に向かってほぼ真南に設定した調査区である。北・中央トレンチの調査結果から深堀りによる墳丘盛土の遺存深度と層序確認を目的として調査を実施した。ここでは南壁１～４層の表層堆積と５～９層の上部堆積土層の直下の標高144.5m以下で墳丘盛土層を確認している。南壁10～15層の墳丘盛土層は上部より砂混じり粘質土、礫混じり粘質土、砂質土、地山粘土ブロック混じり土の互層積みにより形成されており、各層の層相にも細かな水平積みの状況が看取されている。

４．出土遺物

各調査区の上部堆積土層、墳裾部の墳丘盛土より遺物コンテナ３箱程度の総量でほとんど小片ばかりの土器類の出土が見られた。遺構に伴うかたちでの遺物出土はまったく認められなかったが、ヲカタ塚古墳に近い時期の遺物のほとんどは上部堆積土層より出土しており、後世の墳丘改変後の二次的な堆積層に含まれたものであった。以下、図示し得た土器片の提示のみに留めておく。

１は土師器高杯の杯底部より脚柱部付近にかけての破片である。外面にはタテ方向のハケが施されるが、内面調整については摩滅のため調整手法は看取できない。脚柱部内面の杯部見込み中央の裏側には棒状工具による刺突痕跡が明瞭に残る。おそらく製作時の杯と脚部を接合する際の工程に生じた痕跡かもしくは脚の高さを均等なものにする規格化の用途で残されたものであろう。現存高1.8cmを測る。にぶい褐色の色調を呈し、胎土には細かい砂粒を含むがやや精良である。中央トレンチ上部堆積土より出土している。

２は須恵器器台の長脚部分の破片である。外面全体にカキ目を施し、２条一対の沈線による区画内部に波状文の省略形と考えられる斜行した刻線による装飾が施されている。また、各段の中央には長方形透かし孔が穿たれるが、現存部分からは何方に穿たれていたのかは不明である。内面の一部にハケ目様の調整工具痕跡が見られる。現存高は18.6cmを測る。色調は明灰色で焼成は良好である。北トレンチ上

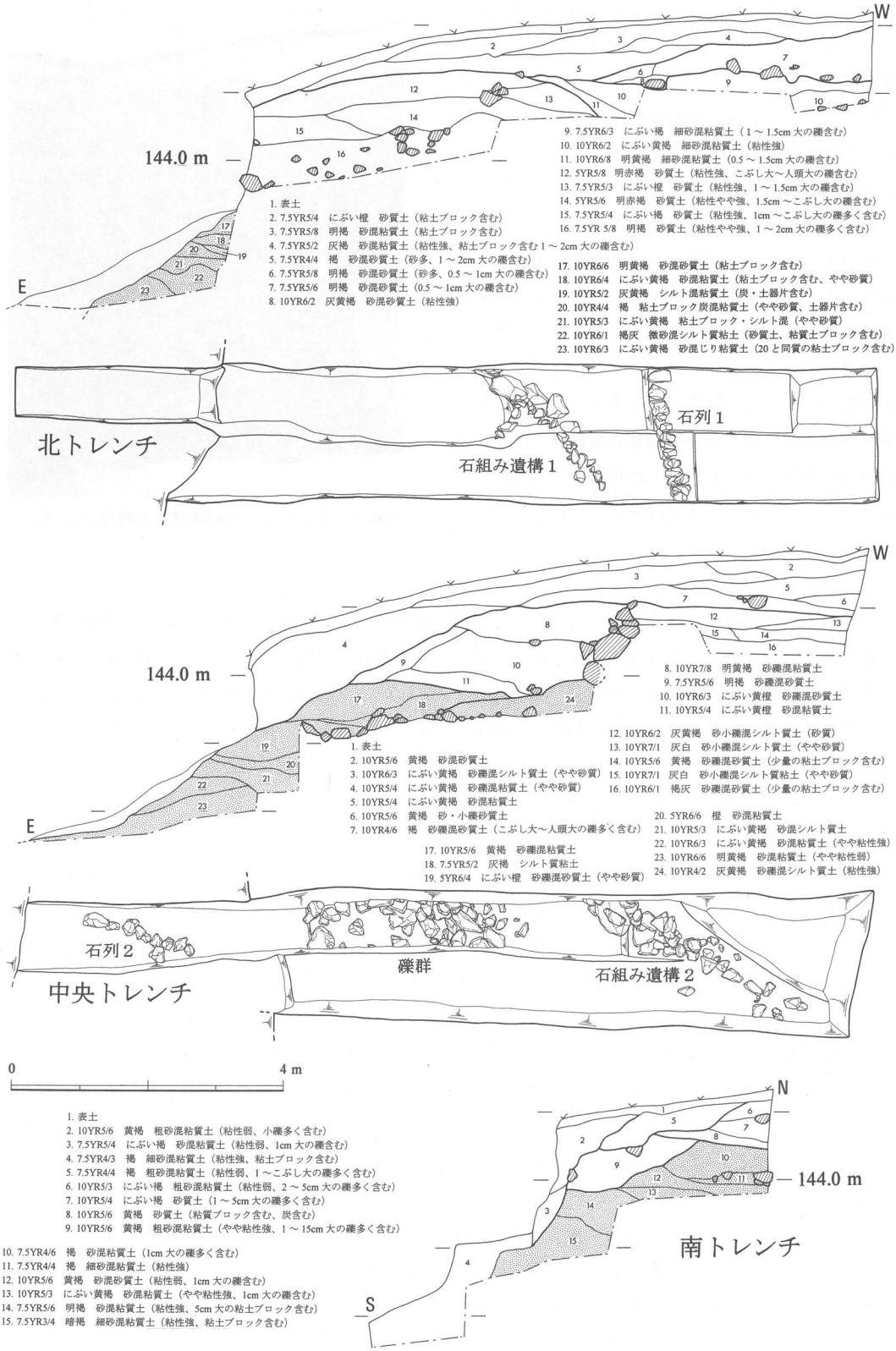


図16　各調査トレンチ平面・土層図（S=1/80）

部堆積層出土である。

3は口縁部のみ残る甕の小片である。全体に焼成時の黒斑が見られ、器面は黒褐色の色調を呈する。外反口縁と内面板ナデ調整から弥生後期～古墳前期初頭の土器と考えられるものである。北トレンチ東端下部の墳丘盛土層より出土している。

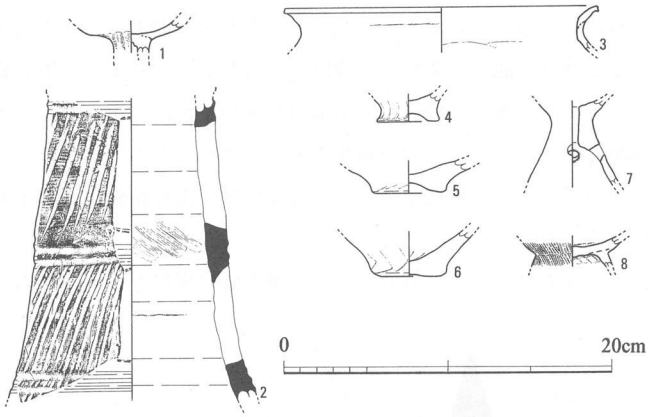


図17　出土土器実測図(S=1/4)

4～6は甕、鉢、壷等の底部片である。いずれも内面には板ナデ痕跡、外面にはナデ調整等が見られ、赤褐～黄褐色の色調を呈している。形態的には弥生後期～古墳前期初頭の帰属が考えられる。4と6は中央トレンチ、5は北トレンチの上部堆積土層よりそれぞれ出土している。

7は小型器台である。中空の器形を呈し、脚裾部には4方に小孔が穿たれている。橙色の色調の胎土にやや粗い砂粒を含む粗製品である。内外面の調整については器面の摩滅が著しいため看取できない。北トレンチ東端下部の墳丘盛土層出土である。

8は東海系のS字状口縁台付甕の底部付近の破片である。外面は櫛目状ハケ調整、甕底部内面には板ナデ、台部の内面には指頭ナデがそれぞれに看取される。にぶい橙色の色調を呈し、胎土には細砂を含む。直接的な搬入品と思われる。概ね古墳前期初頭頃の帰属時期が考えられる土器である。中央トレンチ上部堆積層より出土している。

以上の土器片の他にも、古墳築造以前の遺物として縄文後・晩期の粗製土器片や風化度の進んだサヌカイト製剥片等がわずかながらも墳丘盛土層の混入遺物として出土しており、周辺に時期の遡る遺物の散布、遺跡の存在が予想された。

Ⅲ．まとめ

今回のヲカタ塚古墳墳丘東側の範囲確認調査では、結果として現状の墳丘が後世の改変により著しく破壊を受けて現状のかたちとなった過程を窺い知ることができた。ここではその変遷を再度列記し、最後に古墳の墳形についても触れておくことにする。

調査概要の各調査トレンチの項においても再三述べたように、ヲカタ塚古墳のカマトギ池近接の墳丘は後世の改変等のため、標高144m前後の高さにまで削平されたことが知られた。現状の円丘周囲にのみ破壊が及んだと仮定しても、墳頂より約4m近く斜面上を削り取られており、本来の古墳の姿よりかなりの変化が見込まれる状況であった。墳丘盛土層の遺存面がほぼ平坦面を成していたことから、直接の原因についてはカマトギ池の貯水池としての開削にあることが推定でき、遺物の出土は無いもののほぼ近世頃の時期に最初の大規模な墳丘の破壊が考えられた。また、その後も円丘東側平坦地部分の農地拡張のため徐々に周縁を削り取られていった様子が各トレンチの土層観察より窺い知れた。北・中央トレンチの墳丘盛土上面の削平面上部に構築された**石組み遺構1・2**の相対的な位置関係は図18に示したようになっており、両方の石垣がほぼ平行して向かい合うように下段で標高144m前後の平坦地を区画し

ている。中央トレンチでは墳丘盛土を削り込むが、北トレンチでは礫混じり土による整地で高さを均等にする作業を施していることがわかる。両石組み間の落ち込みは池側に向かって傾斜するものと思われ、こうした施設が池との関わりで設置されたと考えられよう。墳丘盛土の断ち割りによる土層断面観察からは盛土内への礫石の混入による地固めを施す痕跡（中央トレンチ礫群）を確認しており、本来の墳丘規模からそうした盛土内での補強が必要とされるものであったことが想定される。なお、古墳の築造時期については大きく根拠を欠くが、現状では上部堆積層出土の土師器・須恵器片から6世紀代にその一端を求めておきたい。

次に、ヲカタ塚古墳の墳形について調査時に撮影した上空からの航空写真（写真図版）から考えてお

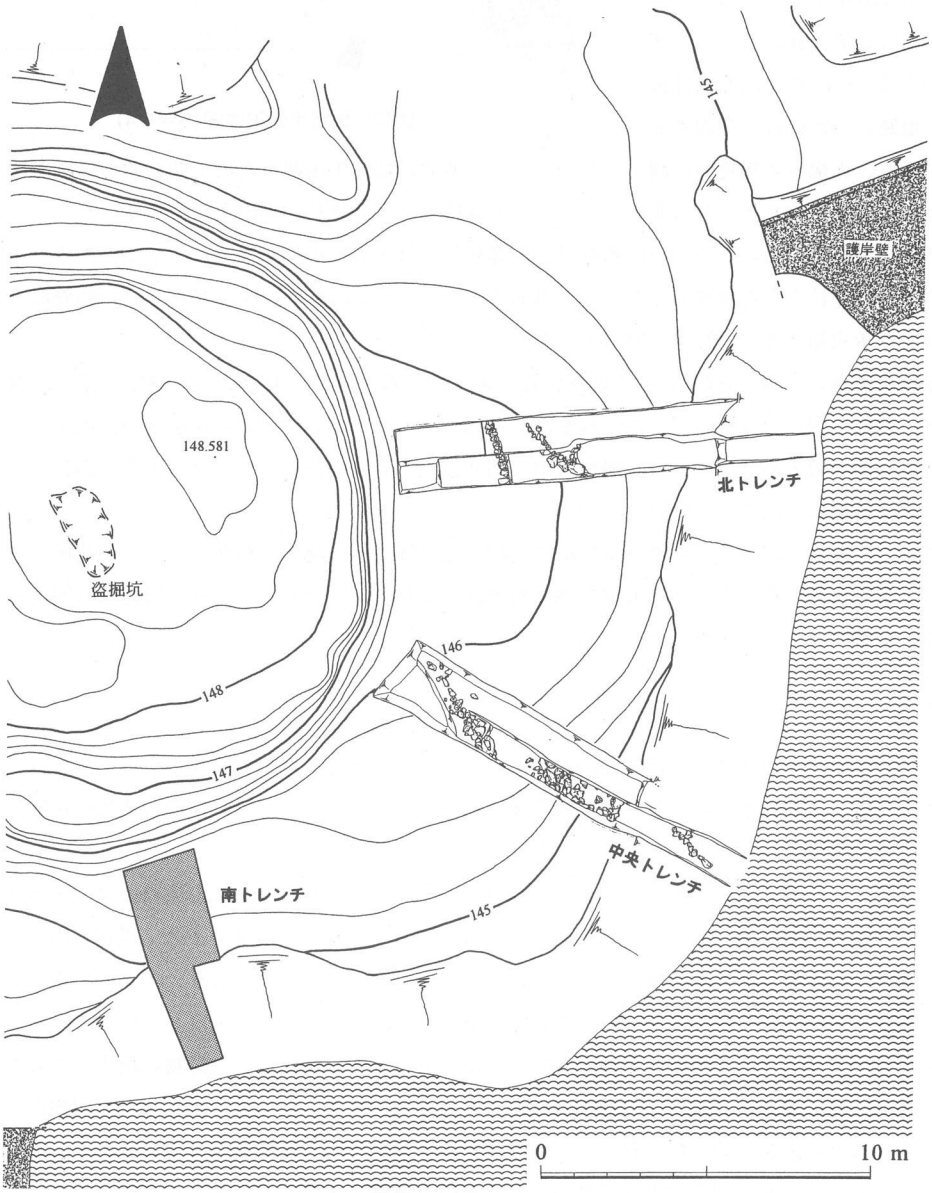


図18　検出遺構間の位置関係（S＝1/200）

きたい。冒頭に記したように、かつては前方部を北東に向けた帆立貝式前方後円墳と認識されていた当古墳であるが、周辺地形図や航空写真で見ると違った見解で捉えられる可能性を見出すことができた。まずカマトギ池の外縁とかつての前方部相当部の北側背面側の地割がほぼ連続した弧状を描くようになる点に注目したい。つまり、これが当古墳の外堤相当のラインを踏襲した地割りであり周濠相当部を開削することでカマトギ池ができたものと考える。周囲の農地化による墳丘の破壊を免れた残存墳丘部がかつて前方部とされた北東の張り出しに相当し、本来の後円部墳裾はその下方の等高線付近の高さで巡るものと考えたい。現状の池岸西辺には池の土堤が築かれ、これを境に極端な高低差をもって田畑が広がるが、南西側の延長に現存円丘の主軸にのるような周囲を石垣で区画した台形状張り出しがある。これを本来の前方部と見なした際には北東～南西に主軸を取る全長120mの古墳となり、今回の調査で墳丘破壊以後の堆積土に含まれた土器類の年代観から後期の前方後円墳として捉えることも可能となる。これはあくまでも推定であるが、墳丘構築時の盛土内の状況や後世の大規模な墳丘破壊後の農地化が進んだ結果、現状の不明瞭な墳形と変貌したものと考えたい。

以上、今回の調査では当古墳の実態把握よりも構成の改変ぶりによる現状地形の成立過程を考える材料を得ることとなった。後円部墳丘本体はおそらく遺存状況が良好と思われるが、将来的にここにも破壊が及ばぬように既に破壊された池岸の更なる崩壊に対する防護対策が早急に求められよう。

参考文献

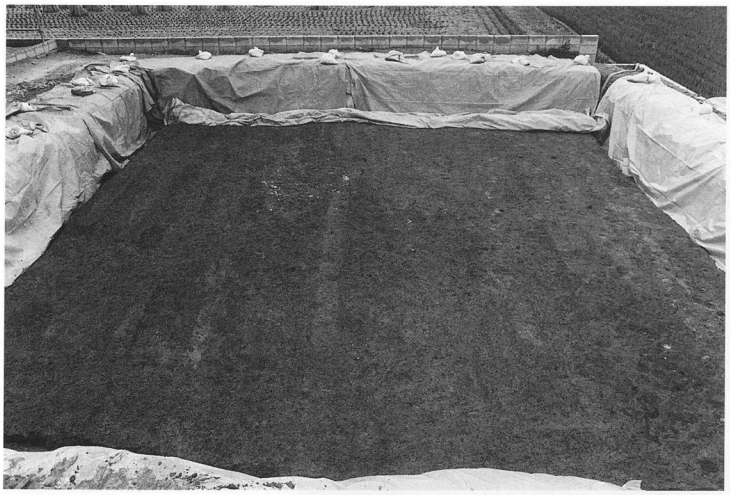
奈良県立橿原考古学研究所編1981　『磯城・磐余の前方後円墳』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第42冊

図版1　柳本立花遺跡1

調査地周辺航空写真
（写真上が北）

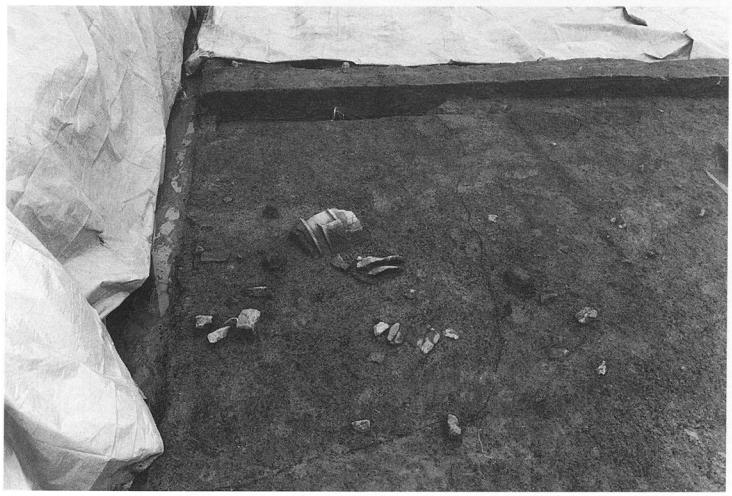
調査区全景垂直写真
（写真上が北）

図版2　柳本立花遺跡2

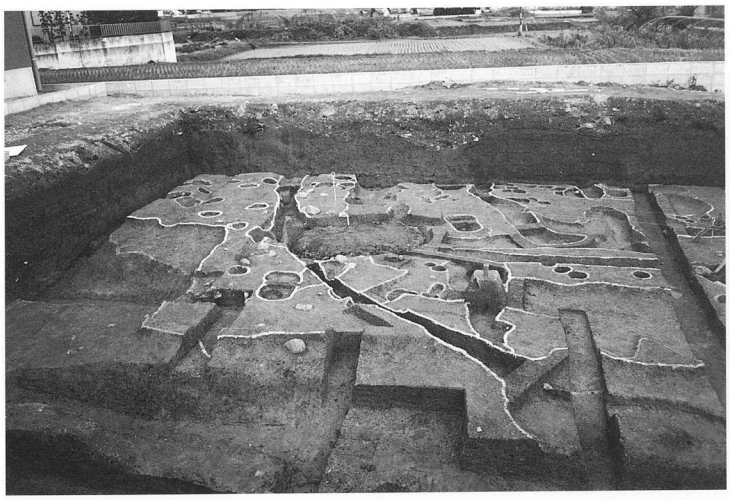


上層遺構面 検出状況
（北から）

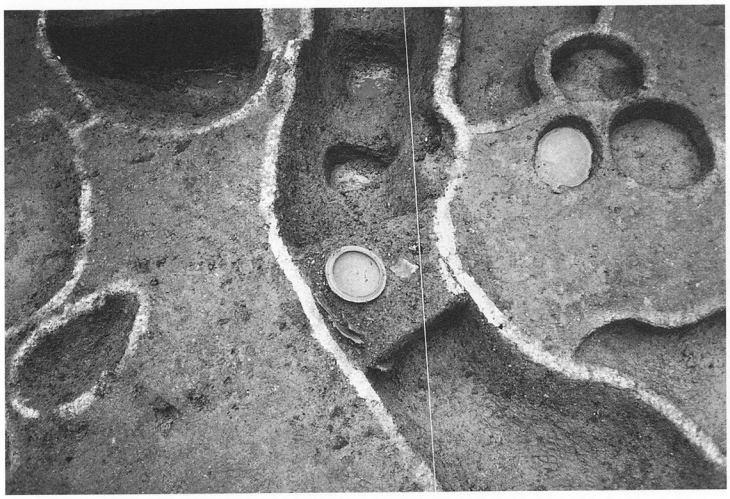
上層遺構面 完堀状況
（東から）



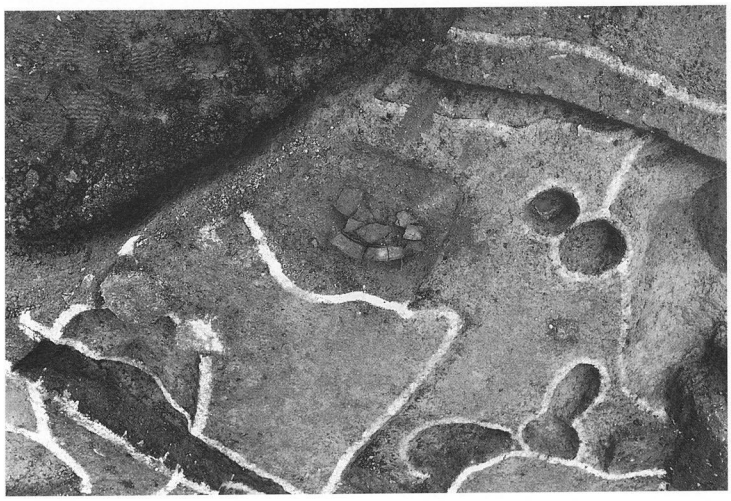
調査区北東角
盾形埴輪検出状況
（遺構確認以前・北から）



調査区南東
遺構完堀状況
（北から）

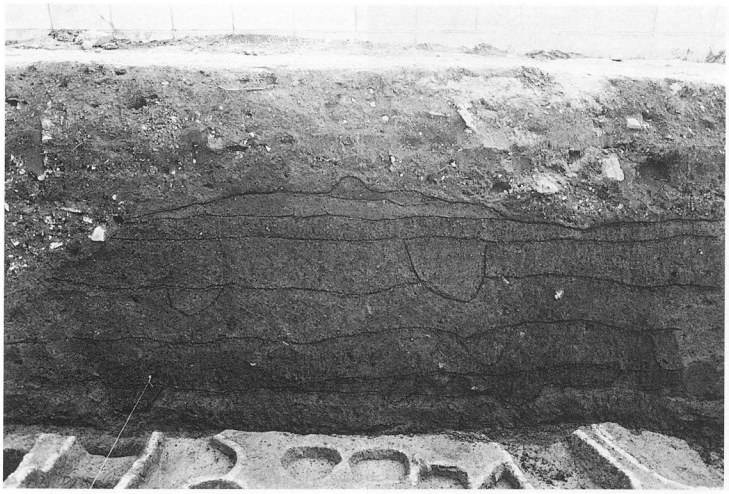


溝SD-007　須恵器検出状況
（南から）

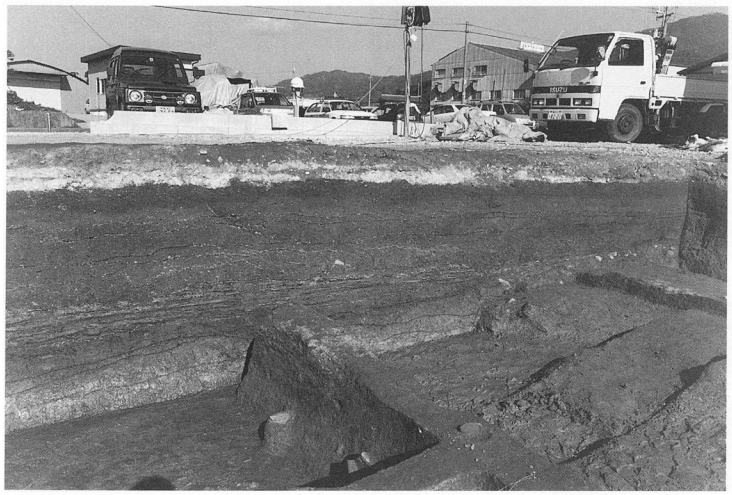


落ち込みSX-04
布留傾向甕検出状況
（北から）

図版4　柳本立花遺跡4

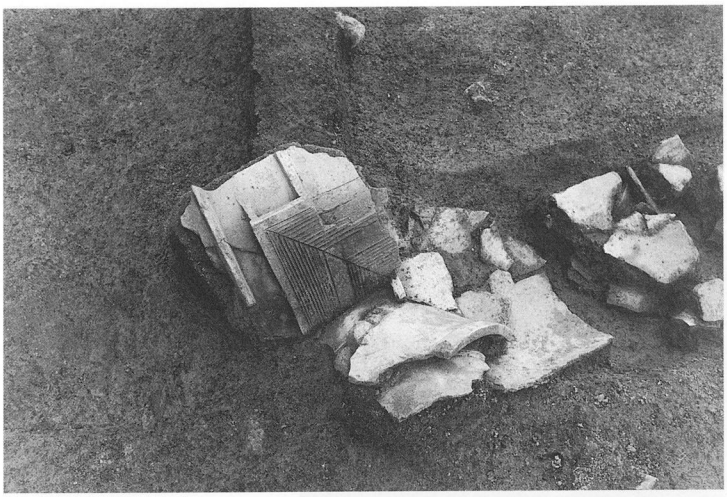


調査区西半南壁土層断面
（北から）



調査区北壁土層断面
（南西から）

古墳周濠上部
溝状落ち込みの埴輪類検出状況
（東から）



古墳周濠上部
溝状落ち込みの盾形埴輪検出状況
（北から）

古墳周濠上部
溝状落ち込みの埴輪類検出状況
（西から）

古墳周濠部分南北アゼ上層断面
（東から）

図版6　ヲカタ塚古墳1

調査区周辺航空写真
（写真上が北西）

調査区全景写真
（写真上が北西）

図版7　ヲカタ塚古墳2

調査前全景（南東から）

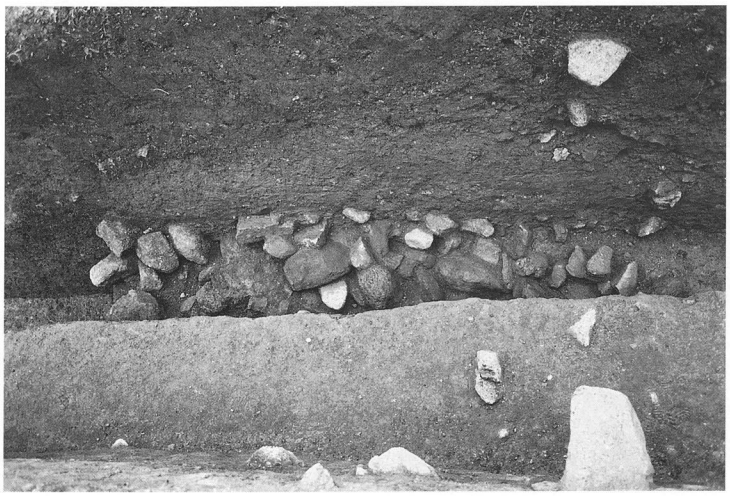
北トレンチ（西から）

中央トレンチ（西から）

図版8　ヲカタ塚古墳3

南トレンチ（北から）

中央トレンチ西半
石組み遺構（南西から）



中央トレンチ東半
墳丘盛り土内礫群（北から）

平成13年３月31日©

天理市埋蔵文化財調査概報
（平成12年度・国庫補助事業）

発　行　天理市教育委員会
編　集　天理市川原城町605番地

印　刷　天　理　時　報　社
天理市稲葉町80番地